宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第130集

山崎上ノ原第２遺跡 Ⅱ

（やまさきうえのはら）

主要地方道宮崎島之内線県単道路橋梁調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００６

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第130集

山崎上ノ原第２遺跡 Ⅱ

（やまさきうえのはら）

主要地方道宮崎島之内線県単道路橋梁調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００６

宮崎県埋蔵文化財センター

山崎上ノ原第2遺跡・山崎下ノ原第1遺跡全景（南より）

SA13・23完掘状況（東より）

SA23遺物出土状況（東より）

SA18・27出土黒色土器

赤彩塗布土器

序

宮崎県教育委員会では、主要地方道宮崎島之内線県単道路橋梁調査に伴い、平成５年度から山崎上ノ原第２遺跡および山崎下ノ原第1遺跡の発掘調査を実施しております。今回報告するものは平成５年度調査、平成14年度調査、平成15年度調査分までの記録です。

今回の調査では、古墳時代の土師器や須恵器、近隣で鍛錬鍛冶が行われていたことを示す鉄滓、そして古墳時代の竪穴住居跡が43軒検出されました。この集落の北側には橦古墳群下原地区が所在しており、この墓域に伴う集落と考えられます。古墳時代の集落のあり方を解明する上で貴重な資料となることでしょう。

本書に収録された記録資料類が歴史研究の資料として広く活用され、当県の埋蔵文化財に対する関心と理解の一助となり、また、生涯学習及び学術研究の分野において役立つことを心から願うものであります。

なお、調査にあたって御協力いただいた地元の方々をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方ならびに関係諸機関の方々に深く感謝申し上げます。

平成18年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長　宮園淳一

例　言・凡　例

1　本書は、主要地方道宮崎島之内線県単道路橋梁調査に伴い、宮崎県教育委員会が実施した山崎上ノ原第２遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、宮崎県土木部宮崎土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査は平成５年４月12日～４月27日、平成５年６月23日～７月15日、平成５年11月９日～26日、平成14年11月27日～平成15年２月５日、平成15年４月24日～８月15日まで行った。

4　現地での実測・写真撮影などの記録は飯田博之、戸高眞知子、和田理啓（平成５・６年度分）、福田泰典、田中光、柳田晴子、丹俊詞、黒木修、古屋美樹が発掘作業員の協力を得て作成した。空中写真撮影は株式会社スカイサーベイに、基準杭設置は有限会社大淀測量設計事務所に委託した。

5　整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面作成・実測・トレースは柳田が整理作業員の協力を得て行った。鉄器実測は柳田、丹俊詞、日高優子が整理作業員の協力を得て行い、トレースは丹、柳田が担当した。また、紡錘車の実測・トレースは日高が担当した。

6　本書で使用した第１図「遺跡位置図」は国土地理院発行の２万５千分の１図「宮崎市」を、第２図「周辺地形図」は宮崎市都市計画図発行の１万分の１図を基に作成した。

7　土層断面及び遺物の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」による。

8　本書で使用した方位は座標北（座標第Ⅱ系）である。レベルは海抜絶対高である。

9　本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
ＳＡ…住居跡　　ＳＣ…土坑　　ＳＤ…土壙墓　　ＳＥ…溝状遺構
遺構実測図の縮尺は１／60　で掲載している。

10　本書で使用したスクリーントーン及びカラーは下記のとおりである。

11　本書の執筆・編集は谷口武範、今塩屋毅行の協力のもと柳田が行った。紡錘車に関する考察は日高が担当した。

12　出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第1章　はじめに
第1節　調査の経緯 …… 1
第2節　調査の組織 …… 1
第3節　遺跡の位置と環境 …… 2
第4節　調査の概要 …… 5
第5節　基本層序 …… 5

第2章　遺構と遺物
第1節　平成14年度調査分 …… 7
B－1区の調査 …… 7
(1) 住居跡（SA） …… 7
(2) 不明遺構（SZ） …… 28
(3) 土坑（SC） …… 29
(4) 溝状遺構（SE） …… 30
(5) B－1区包含層出土の遺物 …… 30
第2節　平成15年度調査分 …… 33
B－2区の調査 …… 33
(1) 住居跡（SA） …… 33
(2) 土坑（SC） …… 89
(3) 溝状遺構（SE） …… 91
(4) B－2区包含層出土の遺物 …… 91
第3節　平成5年度調査分 …… 96
1　AA－1区の調査 …… 96
(1) 住居跡（SA） …… 96
(2) 土坑（SC） …… 98
2　AA－2区の調査 …… 98
(1) 住居跡（SA） …… 98
(2) AA－2区包含層出土遺物 …… 100
3　BB区の調査 …… 101
(1) 住居跡（SA） …… 101
(2) 土壙墓（SD） …… 101
(3) BB区包含層出土遺物 …… 103
第4節　まとめ …… 124
報告書抄録 …… 163

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　山崎上ノ原第２遺跡及び山崎下ノ原１遺跡周辺地形図 …… 4
第３図　山崎上ノ原第２遺跡基本土層柱状図 …… 5
第４図　山崎上ノ原第２遺跡グリッド配置図 …… 6
第５図　Ｂ－１区遺構分布図 …… 7
第６図　ＳＡ１・２・ＳＥ１平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 8
第７図　ＳＡ１土器埋設炉平面図・土層断面図 …… 8
第８図　ＳＡ１出土遺物実測図Ⅰ …… 8
第９図　ＳＡ１出土遺物実測図Ⅱ …… 9
第10図　ＳＡ２出土遺物実測図 …… 10
第11図　ＳＥ１出土遺物実測図 …… 10
第12図　ＳＡ５・ＳＣ２平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 12
第13図　ＳＡ５埋甕平面図・土層断面図 …… 12
第14図　ＳＡ５出土遺物実測図Ⅰ …… 12
第15図　ＳＡ５出土遺物実測図Ⅱ …… 13
第16図　ＳＣ１平面図・土層断面図 …… 15
第17図　ＳＣ２及びＳＣ１出土遺物実測図 … 15
第18図　ＳＺ１平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 15
第19図　ＳＺ１出土遺物実測図 …… 16
第20図　ＳＣ５平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 16
第21図　ＳＣ５出土遺物実測図 …… 16
第22図　ＳＡ３・９平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 17
第23図　ＳＡ９埋甕平面図・土層断面図 …… 17
第24図　ＳＡ３出土遺物実測図 …… 17
第25図　ＳＡ９出土遺物実測図Ⅰ …… 18
第26図　ＳＡ９出土遺物実測図Ⅱ …… 19
第27図　ＳＡ７平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 20
第28図　ＳＡ７埋甕平面図・土層断面図 …… 20
第29図　ＳＡ７出土遺物実測図 …… 20
第30図　ＳＡ６平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 22
第31図　ＳＡ６埋甕平面図・土層断面図 …… 22
第32図　ＳＡ６出土遺物実測図Ⅰ …… 22
第33図　ＳＡ６出土遺物実測図Ⅱ …… 23
第34図　ＳＡ４・８平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 24
第35図　ＳＡ４出土遺物実測図Ⅰ …… 25
第36図　ＳＡ４出土遺物実測図Ⅱ …… 26
第37図　ＳＡ８出土遺物実測図 …… 27
第38図　Ｂ－１区包含層出土遺物実測図 …… 31
第39図　Ｂ－２区遺構分布図 …… 33
第40図　ＳＡ24・27平面図・土層断面図 …… 34
第41図　ＳＡ24出土遺物実測図 …… 35
第42図　ＳＡ27出土遺物実測図 …… 35
第43図　ＳＡ33平面図・土層断面図 …… 36
第44図　ＳＡ33出土遺物実測図 …… 36
第45図　ＳＡ31・32平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 38
第46図　ＳＡ31出土遺物実測図 …… 39
第47図　ＳＡ32出土遺物実測図Ⅰ …… 39
第48図　ＳＡ32出土遺物実測図Ⅱ …… 40
第49図　ＳＡ10・26・48平面図・土層断面図 … 41
第50図　ＳＡ26出土遺物実測図 …… 42
第51図　ＳＡ18出土遺物実測図Ⅰ …… 44
第52図　ＳＡ18出土遺物実測図Ⅱ …… 45
第53図　ＳＡ10出土遺物実測図 …… 45
第54図　ＳＡ34・36・37平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 46
第55図　ＳＡ34出土遺物実測図Ⅰ …… 47
第56図　ＳＡ34出土遺物実測図Ⅱ・及びＳＡ36出土遺物実測図 …… 48
第57図　ＳＡ28・29平面図・土層断面図 …… 49
第58図　ＳＡ28出土遺物実測図 …… 50
第59図　ＳＡ29出土遺物実測図Ⅰ …… 51
第60図　ＳＡ29出土遺物実測図Ⅱ …… 52
第61図　ＳＡ30平面図・土層断面図 …… 53
第62図　ＳＡ30出土遺物実測図 …… 53
第63図　ＳＡ17・19・35・ＳＣ７平面図・土層断面図 …… 54

第64図　ＳＡ17出土遺物実測図Ⅰ …… 55
第65図　ＳＡ17・ＳＣ７出土遺物実測図 …… 57
第66図　ＳＡ19出土遺物実測図 …… 58
第67図　ＳＡ35出土遺物実測図 …… 59
第68図　ＳＡ15・16平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 61
第69図　ＳＡ15出土遺物実測図Ⅰ …… 62
第70図　ＳＡ15出土遺物実測図Ⅱ …… 64
第71図　ＳＡ16出土遺物実測図 …… 64
第72図　ＳＡ11平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 65
第73図　ＳＡ11出土遺物実測図 …… 65
第74図　ＳＡ14・25・ＳＣ９平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 66
第75図　ＳＡ14出土遺物実測図Ⅰ …… 66
第76図　ＳＡ14出土遺物実測図Ⅱ …… 68
第77図　ＳＡ25・ＳＣ９出土遺物実測図 …… 69
第78図　ＳＡ23・ＳＥ３平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 70
第79図　ＳＡ23土器（483）・石器（504）平面図・土層断面図 …… 70
第80図　ＳＡ23出土遺物実測図Ⅰ …… 71
第81図　ＳＡ23出土遺物実測図Ⅱ …… 72
第82図　ＳＡ23出土遺物実測図Ⅲ …… 73
第83図　ＳＡ23出土遺物実測図Ⅳ …… 74
第84図　ＳＡ13・20平面図及び遺物出土状況、ＳＡ44想定範囲・土層断面図 …… 76
第85図　ＳＡ13埋甕及び竈平面図・土層断面図及び竈内出土遺物実測図 …… 76
第86図　ＳＡ13出土遺物実測図Ⅰ …… 77
第87図　ＳＡ13出土遺物実測図Ⅱ …… 78
第88図　ＳＡ13出土遺物実測図Ⅲ …… 79
第89図　ＳＡ20出土遺物実測図Ⅰ …… 81
第90図　ＳＡ20出土遺物実測図Ⅱ …… 82
第91図　ＳＡ20出土遺物実測図Ⅲ …… 83
第92図　ＳＡ20出土遺物実測図Ⅳ …… 84
第93図　ＳＡ22平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 86
第94図　ＳＡ22埋甕平面図・土層断面図 …… 86
第95図　ＳＡ22出土遺物実測図 …… 86
第96図　ＳＡ21・ＳＥ２平面図及び遺物出土状況・土層断面図 …… 87
第97図　ＳＡ21埋甕平面図・土層断面図 …… 87
第98図　ＳＡ21出土遺物実測図 …… 88
第99図　ＳＣ６平面図・土層断面図 …… 89
第100図　ＳＡ12平面図及び遺物出土状況・土層断面図及び埋甕土層断面図 …… 90
第101図　ＳＡ12出土遺物実測図 …… 90
第102図　Ｂ－２区包含層遺物分布状況 …… 91
第103図　Ｂ－２区包含層出土遺物実測図Ⅰ… 92
第104図　Ｂ－２区包含層出土遺物実測図Ⅱ… 93
第105図　Ｂ－２区包含層出土遺物実測図Ⅲ… 94
第106図　Ｂ－２区包含層出土遺物実測図Ⅳ… 95
第107図　ＡＡ－１区遺構分布図 …… 96
第108図　ＳＡ38平面図・土層断面図 …… 97
第109図　ＳＡ38出土遺物実測図 …… 97
第110図　ＳＡ39平面図・土層断面図 …… 97
第111図　ＳＡ39出土遺物実測図 …… 97
第112図　ＳＣ８平面図・土層断面図 …… 98
第113図　ＡＡ－２区遺構分布図及びＳＡ40・41土層断面図 …… 99
第114図　ＳＡ41出土遺物実測図 …… 100
第115図　ＡＡ－２区包含層出土遺物実測図 … 100
第116図　ＢＢ区遺構分布図 …… 101
第117図　ＳＡ42平面図・土層断面図 …… 102
第118図　ＳＡ42出土遺物実測図 …… 102
第119図　ＳＡ43平面図・土層断面図 …… 103
第120図　ＳＡ43出土遺物実測図 …… 103
第121図　ＳＤ１平面図・土層断面図 …… 103
第122図　ＳＤ１出土遺物実測図 …… 103
第123図　ＢＢ区包含層出土遺物実測図 …… 103
第124図　山崎上ノ原第２遺跡住居跡変遷図　124
第125図　住居跡度数分布図 …… 126
第126図　時期別住居跡種類 …… 126
第127図　集落変遷図 …… 127、128
第128図　住居種類別の分布状況 …… 129
第129図　各地方の竈形土器 …… 131
第130図　県内出土鏃子状鉄製品 …… 133
第131図　重量－径散布図 …… 134

表目次

第1表　B－1区出土土器観察表（1）……104
第2表　B－1区出土土器観察表（2）……105
第3表　B－1区出土土器観察表（3）……106
第4表　B－2区出土土器観察表（1）……107
第5表　B－2区出土土器観察表（2）……108
第6表　B－2区出土土器観察表（3）……109
第7表　B－2区出土土器観察表（4）……110
第8表　B－2区出土土器観察表（5）……111
第9表　B－2区出土土器観察表（6）……112
第10表　B－2区出土土器観察表（7）……113
第11表　AA－1、2、BB区出土土器観察表…113
第12表　B－1区出土須恵器観察表（1）……114
第13表　B－1区出土須恵器観察表（2）……115
第14表　玉類及び紡錘車観察表……115
第15表　B－2区出上須恵器観察表（1）……116
第16表　B－2区出土須恵器観察表（2）……117
第17表　B－2区出土須恵器観察表（3）……118
第18表　AA－1、2、BB区出土須恵器観察表…118
第19表　出土陶磁器観察表……118
第20表　石器計測表（1）……119
第21表　石器計測表（2）……120
第22表　鉄器観察表……121
第23表　鉄滓計測表……122
第24表　山崎上ノ原第2遺跡住居跡一覧……123
第25表　県内鐙子状鉄製品集成……132
第26表　馬歯出土住居跡一覧……135

図版目次

巻頭図版1　山崎上ノ原第2遺跡・山崎下ノ原第1遺跡全景（南より）
巻頭図版2　SA13・23完掘状況（東より）／SA23遺物出土状況（東より）
巻頭図版3　SA18・27出土黒色土器／赤彩塗布土器
図版1　B－2区古墳時代完掘状況／SA21・22完掘状況……139
図版2　SA4・6・7・8完掘状況（東より）／SA6遺物出土状況（南より）／SA6埋甕（119）（南より）／SA6埋甕（118）（南より）／SA7埋甕（105）（東より）……140
図版3　SA12完掘状況（南より）／SA12遺物出土状況（南より）／SA12埋甕（南より）／SA12遺物出土状況（南東より）／作業風景（南より）……141
図版4　SA13・23完掘状況（東より）／SA13（SA44）竈検出状況（南より）／SA13埋甕（510）（南より）／SA23遺物出土状況（南東より）／SA23遺物出土状況（北東より）……142
図版5　SA3・9完掘状況（北より）／SA9埋甕（南より）／SA36遺構検出状況（北東隅）／SA10・18・36完掘状況（南より）／SA21完掘状況（北より）／SA20馬歯出土状況／SA20遺物出土状況（1）／SA20遺物出土状況（2）……143
図版6　SA13出土土器（1）／SA14出土土器（1）……144
図版7　SA15出土土器（1）／SA20出土土器（1）……145
図版8　SA23出土土器（1）／ミニチュア土器……146
図版9　SZ1出土竈形土器（67）／SA2出土竈形土器（22）／SA1・2出土竈形土器（20）／鋪面より……147

図版10　ＳＡ１出土土器／ＳＡ５出土土器（1）／ＳＡ５出土土器（2）／ＳＡ５出土土器（3）／ＳＡ５出土土器（4）／ＳＣ５出土土器 …… 148
図版11　ＳＡ７出土土器（1）／ＳＡ６出土土器（1）／ＳＡ４出土須恵器（1）／ＳＡ18出土土器（1）／ＳＡ18出土土器（2）／ＳＡ18出土須恵器（1） …… 149
図版12　ＳＡ34出土土器（1）／ＳＡ17出土土器（1）／ＳＡ17出土土器（2）／ＳＡ17出土須恵器（1）／ＳＡ19出土土器／ＳＡ15出土土器（1） …… 150
図版13　ＳＡ15出土土器（2）／ＳＡ14出土土器／ＳＡ23出土土器（2）／ＳＡ23出土土器（3）／ＳＡ23出土土器（4）／ＳＡ23出土土器（5） …… 151
図版14　ＳＡ23出土土器（6）／ＳＡ23出土土器（7）／ＳＡ23出土土器（8）／ＳＡ13出土土器（2）／ＳＡ13出土土器（3）／ＳＡ13出土土器（4） …… 152
図版15　ＳＡ20出土土器（2）／ＳＡ20出土土器（3）／ＳＡ20出土土器（4）／ＳＡ20出土土器（5）／ＳＡ20出土土器（6）／ＳＡ20出土土器（7） …… 153
図版16　ＳＡ20出土土器（8）／ＳＡ20出土土器（9）／ＳＡ20出土土器（10）／ＳＡ20出土土器（11）／ＳＡ21出土土器（1）／ＳＡ21出土土器（2） …… 154
図版17　ＳＡ12出土土器／Ｂ－２区包含層出土須恵器（1）／Ｂ－２区包含層出土馬鈴（正面）／Ｂ－２区包含層出土馬鈴（側面）／ＳＡ39出土土器／ＳＡ42出土土器 …… 155
図版18　ＳＡ９出土土器／ＳＡ６出土土器（2）／ＳＡ４出土須恵器（1）／ＳＡ18出土須恵器（2）／ＳＡ34出土土器（2）／ＳＡ34出土土器須恵器／ＳＡ29出土土器／ＳＡ17出土土器（3） …… 156
図版19　ＳＡ17出土須恵器（2）／ＳＡ19出土須恵器／ＳＡ14出土須恵器／ＳＡ23出土土器（9）／Ｂ－２区包含層出土遺物／Ｂ－２区包含層出土須恵器（1）／Ｂ－２区包含層出土須恵器（2）／ＳＤ１出土土器 …… 157
図版20　出土土錘・紡錘車／出土石器（1） …… 158
図版21　出土石器（2）／出土石器（3） …… 159
図版22　出土軽石（1）／出土軽石（2） …… 160
図版23　出土鉄器（1）・管玉（254）／出土鉄器（2） …… 161
図版24　出土鉄滓（1）／出土鉄滓（2） …… 162

第１章　はじめに

第１節　調査の経緯

主要地方道宮崎島之内線は、県庁前から東へ延び、そして一の宮交差点を曲がり宮崎市大字島之内までの全長13.5kmにおよぶが、今回、宮崎土木事務所において大型観光施設のオープンや物流を担う大型車が多く利便性と安全性を高め、地域の活性化を図ることを目的に市民の森近くまでの911mについて、ふるさと県道整備事業として道路の拡幅工事および新たなバイパスが計画された。

以前より工事計画周辺は多くの土器が散布しており遺跡の存在は確実視されていたため、平成４年度に宮崎県文化課は宮崎土木事務所と協議を進め、まず、大型観光施設近くの交差点の拡幅部分について発掘調査を実施することとなった。用地買収完了箇所から順次調査を進めることとなり、平成５年度に、平成５年４月12日～４月27日（250㎡）、平成５年６月23日～７月15日（30㎡）、平成５年11月９日～26日（400㎡）の合計３回の調査を行った。

以後、諸般の事由により調査は休止していたが、再度平成９年度に宮崎土木事務所から路線内の遺跡の有無の照会があった。そこで文化課は平成10年２月に現地踏査、同12月に確認調査を実施し遺跡の存在が確認されたため、土木事務所との協議を行い、用地買収終了地点、路線南側起点部分となる山崎下ノ原第１遺跡・山崎上ノ原第２遺跡の一部（7,700㎡）について調査を実施することとなった。調査は平成13～14年度に本調査、平成14年～平成15年度にかけて遺物整理を行い報告書が刊行されている。

本書となる山崎上ノ原第２遺跡の残り部分については、用地買収後の平成14年11月27日～平成15年２月５日に620㎡を、平成15年４月24日～８月15日に1,092㎡の調査実施し、これをもって平成５年から行われてきたすべての発掘調査を終了した。なお、本書には調査区が隣接していることから平成５年度と平成14年11月～平成15年８月まで実施した発掘調査の記録を掲載している。

第２節　調査の組織

山崎上ノ原第２遺跡Ⅱの発掘調査および整理作業は下記の組織で実施した。

平成５年度
文化課長　甲斐　教雄　　同課長補佐　田中　雅文　　庶務係長　税田　輝彦
主幹兼埋蔵文化財第二係長　岩永　哲夫　　調査担当　主事　飯田　博之　主事　戸高　眞知子

平成14～17年度
所長　米良　弘康（平成14・15年度）　宮園　淳一（平成16・17年度）
副所長　大薗　和博（平成14・15年度）
副所長兼調査第二課長　岩永　哲夫
総務課長　宮越　尊（平成17年度）
総務係長　亀井　維子（平成14年度）　主幹兼総務係長　石川　恵史（平成15～17年度）
調査第三係長　首付　和樹（平成14～16年度）　谷口　武範（平成17年度）
調査担当（平成14年度）　主事　柳田　晴子　調査員　丹　俊詞　調査員　黒木　修
（平成15年度）　主査　田中　光　主事　柳田　晴子　調査員　古屋　美樹
整理担当（平成16・17年度）　主事　柳田　晴子

第３節　遺跡の位置と環境

１　地理的環境

山崎上ノ原第１遺跡は、宮崎平野部東端、宮崎市域では北東部にあたる宮崎市山崎町字上ノ原に所在し、宮崎平野部を貫流する大淀川の河口から北に約６㎞、現在の海岸まで約２㎞の標高約８～12m砂丘列上に位置する。本遺跡の立地する山崎町周辺から大淀川河口付近にかけて、縄文時代や弥生・古墳時代等における海進・海退の繰り返しによっていくつもの南北方向に長い砂丘列およびその東西に氾濫源や低地（後背湿地）が広がり、これら沖積低地形を下田島面群と称されている。内陸部より下田島Ⅰ～Ⅳ面の四つに区分され、下田島Ⅰ面は最も内陸部（西側）に位置し、砂丘（第１砂丘）列は標高が15mを超え最も高く、佐土原町広瀬地区から帯状に南に伸び、檍中学校付近まで達し、大淀川北に位置し弧

1　山崎上ノ原第２遺跡　　2　山崎上ノ原第１遺跡　　3　山崎下ノ原第１遺跡　　4　檍５号墳
5　檍６号墳　　6　猿野遺跡　　7　檍１号墳　　8　檍古墳　　9　池開・江口遺跡　　10　北中遺跡
11　大町遺跡　　12　宮脇遺跡　　13　浄土江遺跡　　14　多宝寺遺跡　　15　竹之下遺跡　　16　船塚古墳
17　垣下遺跡　　18　黒太郎遺跡　　19　前田遺跡　　20　運ヶ池横穴群　　21　上北方横穴群
22　池内横穴群　　23　下北方古墳群　　24広島古墳群

第１図　遺跡位置図（S=1/50,000）

を描きながら東流する新別府川によって断ち切られている。現在、この砂丘列では村角や波島地区などの集落が営まれるとともに落花生やスイカ等の畑地としても利用されている。また、砂丘列に挟まれた低地（後背湿地）は古来より水田として開発されていたと想定される。

2　歴史的環境

本遺跡は、下田島Ⅱ面の砂丘列（第２砂丘列）にあり、近隣では、檍古墳群、山崎下ノ原第１遺跡、猿野遺跡、石神遺跡などみられ、新別府川左岸まで弥生時代から古墳時代の遺跡が数多く確認されている。さらに、古代では遺跡すぐ北に『延喜式』に記載されている日向の十六駅のうち江田（石田）駅に推定されている江田神社が鎮座する。

古墳時代では平成15年度に報告された山崎下ノ原第１遺跡・山崎上ノ原第２遺跡において、墓域とその基盤と想定される集落の状況が看取できる。山崎下ノ原第１遺跡では道路幅の調査にもかかわらず現存する円墳以外に減失古墳や土壙墓、馬埋葬土坑が確認され、檍５号墳の周溝に隣接した土坑より鉄地金銅装張馬具が出土するなど、遺跡周辺が５世紀末から６世紀末までの約100年間高塚古墳や土壙墓からなる墓域として利用されている。また、その基盤となる山崎上ノ原第１・第２遺跡の集落では多量の土器とともに滑石製遺物や鉄滓・鍛造剥片など鉄器生産関連の注目すべき遺物も出土している。また、遺跡南約３kmには布留系土器を多く出土した猿野遺跡がある。また、新別府川左岸の微高地には国内でも最大級の木棺を有する宮崎平野部における初現期の前方後円墳である檍１号墳が所在する。そのほか宮崎平野部中央、宮崎駅周辺では古墳時代後期から平安時代まで継続する浄土江遺跡や宮脇遺跡・大町遺跡など広範囲に集落が展開する。さらに、その西側には広島古墳群が位置し、本遺跡のような集落と墓地の状況が認められる。このように５世紀頃までは微高地などに点在していた遺跡が６世紀以降平野部各所に拡大・拡散していく状況が想定され、同時期の水田遺構が大足を出土した前田遺跡や内宮田遺跡など平野部低地各所で検出されていることからも裏付けされよう。

古代・中世の遺跡は周辺では、平成15年度に報告の山崎下ノ原第１遺跡・山崎上ノ原第２遺跡において平安時代の竪穴住居や土壙墓、『勾』の墨書土器のほか中世の土壙墓等が検出され、猿野遺跡では溝状遺構から縄目タタキの平瓦が出土している。また、檍北小学校遺跡では奈良時代の水田も確認されている。さらに、下田島Ⅲ面の微高地に位置する池岡・江口遺跡では15世紀代の区画された居館の調査が行われるなど、各時代の沖積低地における人々の進出（開発）状況が見えつつある。

参考文献

「浄土江遺跡」宮崎市教育委員会　1981
「浄土江遺跡　Ⅱ」宮崎市教育委員会　1993
「猿野遺跡・荻崎第２遺跡」宮崎市教育委員会　1996
「大町遺跡」宮崎市文化財調査報告書　第33集　宮崎市教育委員会　1998
「猿野遺跡・荻崎第２遺跡」宮崎市教育委員会　1996
「前田遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第９集　宮崎県埋蔵文化財センター　1998
「大淀川の歴史」「大淀川の歴史」編集委員会　建設省九州地方建設局宮崎工事事務所　1998
「石用遺跡・友尻遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第22集　宮崎県埋蔵文化財センター　2000
「内宮田遺跡・樽迫遺跡・中別府遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第30集　宮崎県埋蔵文化財センター　2001
「町屋敷遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第39集　宮崎県埋蔵文化財センター　2001
「江田原第３遺跡」宮崎市文化財調査報告書　第50集　宮崎市教育委員会　2002
「宮脇第２遺跡」宮崎市文化財調査報告書　第55集　宮崎市教育委員会　2003
「山崎上ノ原第２遺跡・山崎下ノ原第１遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第79集　宮崎県埋蔵文化財センター　2003
「池開・江口遺跡」宮崎市文化財調査報告書　第59集　宮崎市教育委員会　2004
「宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書Ⅱ〔リゾート地区を中心に〕」宮崎市教育委員会　1990
「宮崎県史（通史編原始・古代１）」宮崎県　1997

※塗り潰した箇所が今回報告分

第2図　山崎上ノ原第2遺跡及び山崎下ノ原第1遺跡周辺地形図（S=1/10,000）

第４節　調査の概要

１　調査区の設定

平成13年・14年度調査時に調査区を便宜上９区に分割し、その区割で報告も行っているので、今回もその区名を遵守する。また、平成５・６年度調査分の調査範囲の区割が行われていなかったので新たに追加しAA区、BB区として報告する。

平成５年度作業風景

調査は平成５年度には４月12日～４月27日、平成５年６月23日～７月15日、平成５年11月９日～26日の合計３回、また、平成14年度には11月５日～平成15年２月５日、平成15年度は４月24日～８月13日に調査を行った。平成 14・15年度にB区を２回に分けて調査を行ったため、今回Ｂ－１区、Ｂ－２区とB区を二分割し報告している。

調査は国土座標に合わせた10m×10mのグリッドを設定し行った。

まず調査はバックホーで第Ⅱ層の漸移層まで（表土より約30－40cm）除去し、その後は手掘りで基本層序第Ⅲ層上面まで手掘りで作業を行った。通常の調査であれば調査範囲杭より約１m程度安全のため内側を掘り下げるが、この遺跡は砂質で調査区の壁が崩れやすいのを考慮し、幅２m以上残し調査を進めた。次にジョレンによる精査後、遺構検出・確認を行い、遺構と想定される箇所について小トレンチで遺構立ち上がりを確認し掘り下げを行った。しかし、調査区は砂丘のため調査面の乾燥・砂の飛散が激しく、常時散水を行いながらの作業となった。特に遺構検出時は砂が湿ってないと遺構埋土の違いを判断できず、散水は必至であった。さらに乾燥を防ぐため作業箇所以外はブルーシートで覆い乾燥をできるだけ防ぐよう心掛けた。その他、各遺構の土層確認用に残すベルトは通常約30cmの厚さだが、砂質で崩れやすく、見えにくいので何度も削ることを想定し約50cmの厚さで残した。

調査区の全体図は平板で1/50又は1/100、もしくはトランシットによる実測により行った。各遺構の図面は1/20もしくは1/40で作成した。遺構によっては遺物の出土状況平面図も1/20もしくは1/10で記録を行った。

写真撮影は６×６版モノクロ・カラー、35㎜モノクロ・リバーサル・カラー写真を併用した。遺跡の空中写真については業者に委託して行った。

第５節　基本層序

平成15年度報告分調査と相違ないため、「山崎上ノ原第２遺跡・山崎下ノ原第１遺跡」（宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第79集）より引用する。

基本層序
第Ⅰ層
第Ⅱ層
第Ⅲ層
第Ⅳ層
第Ⅴ層

第Ⅰ層　褐色～黒褐色層。平均20cm程度の厚さ（最大で80cm近く）で堆積する。砂質が低く、ブロック状の褐色～黒褐色土を含む。撹乱のためか遺物（土器片）を多く含む。造成土・耕作土と考えられる。

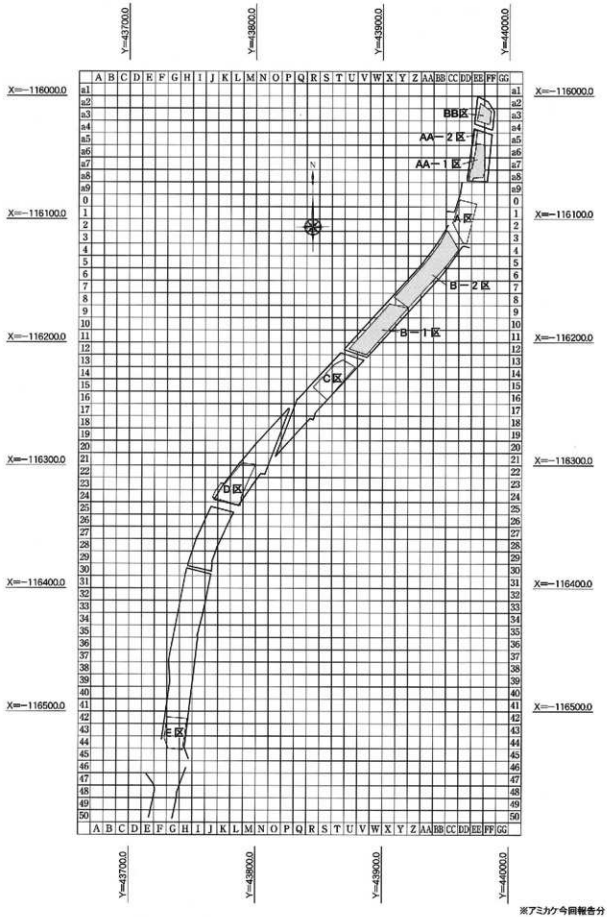
第Ⅱ層　黒褐色砂質土層。厚さ20～60cm程度の厚さで堆積する。他の砂質土に比べて砂粒が細かく、土の混入割合が高い。色調はチョコレート色に似ている。

第Ⅲ層　褐色砂質土層。厚さ20～60cmの厚さで堆積する。第Ⅱ層と似ているが、色調が明るく、砂粒が少し粗くなっている。

第Ⅳ層　青灰砂層。かなり厚く堆積している。砂粒は粗く、砂のみで構成されている層である。

第Ⅴ層　暗青灰砂層（基盤層）

第３図　山崎上ノ原第２遺跡基本土層柱状図



※アミカケ今回報告分

第4図　山崎上ノ原第2遺跡グリッド配置図（S=1/3,000）

第２章　遺構と遺物

本書に掲載した遺構数は，古墳時代の住居跡42軒（SZ１も加える），土坑５基，土壙墓1基、溝状遺構１条、時期不明の住居跡２軒・土坑２基・溝状遺構２条である。遺構は表土を重機で除去後，基本層序第Ⅲ層上面で検出し調査を行った。平成５年度調査分と平成14・15年度調査分を各区に分け、説明を行う。遺物については殆どが遺構内出土である。ここでは遺物については主なものについてのみ記述しており，詳細は土器観察表を参照されたい。また、遺物の時期認定に須恵器は田辺昭三編年、土師器は今塩屋・松永編年を使用している。

第１節　平成14年度調査分

Ｂ－１区の調査（第５図）

南側より順に、住居跡（SA）、不明遺構（SZ）、土坑（SC）、溝状遺構（SE）の順に説明していくこととする。

（１）住居跡（SA）

SA１（第６～９図　1－19）

位置　V12、V13、W12、W13グリッド。調査区の南東側。

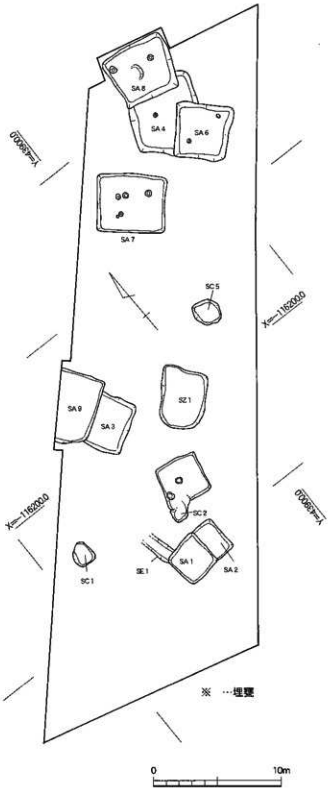
重複　SA２、SE１を切る。

規模　長軸（3.20）×短軸2.86×深さ0.35m、6.5㎡。

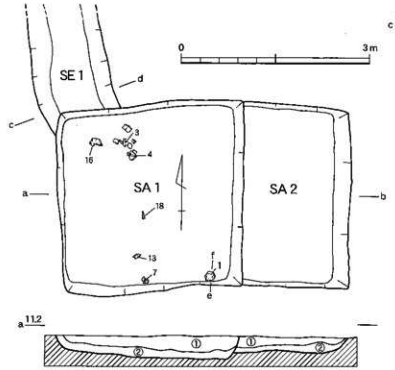
形状　正方形

柱穴・周溝　不明。

遺構調査状況　黒くしまった炭化物を含む砂質土で、表土剥ぎの時点より平面上で範囲を確定できた。埋土中より土器小片が多数出土したが一括で取上げを行った。確実に床面直上として取上げできたのはわずかであった。そして北西側の壁にSE１の

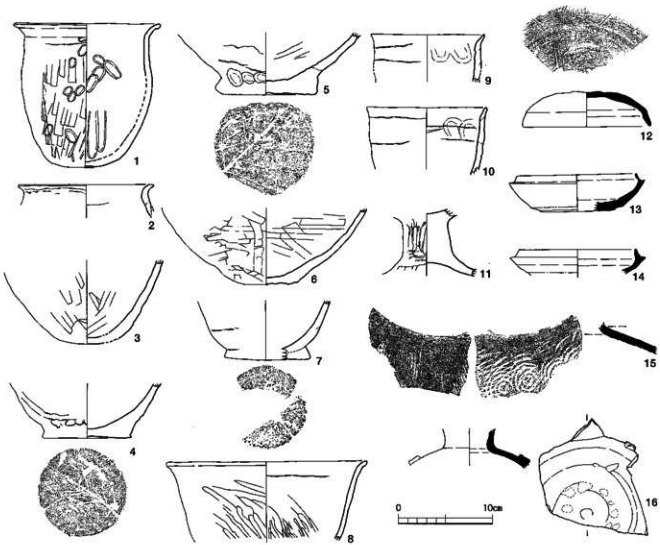


第５図　Ｂ－１区遺構分布図（S=1/300）

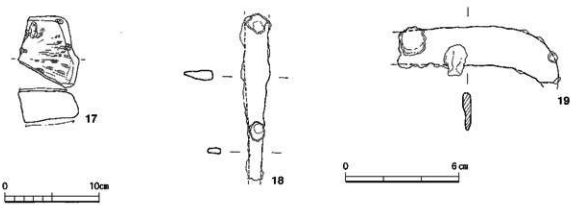


第7図　SA1 土器埋設炉平面図・土層断面図（S=1/30）

第6図　SA1・2・SE1 平面図及び遺物出土状況・土層断面図（S=1/60）



第8図　SA1 出土遺物実測図Ⅰ（S=1/4）



第9図　SA1出土遺物実測図Ⅱ（17はS=1/4、他 S=1/2）

立ち上がりを確認した。住居内施設は住居の対角線上南東隅付近で埋甕が検出されている。土器は小型の長胴甕で口縁部の打ち欠き等は行われておらずほぼ完形である。土器の上半分以上が床上に突出している。掘り込み・埋土は検出の失敗により確認できなかった。

遺物　床面直上と考えられる遺物は少なく、須恵器1点（16）、土師器4点（1，6，8）である。

1は小型の甕で胴部中央は帯状に赤化しており、胴部下半は黒変・ススが付着している。その出土状況から埋甕炉として使用されたと思われる。

12は須恵器の坏蓋だが、未焼成なのか胎土が磁器化しておらず、内外面風化している。16は提瓶で、把手がボタン状を呈し、正面にユビオサエがみられる。

17は珪長石の砥石で一部欠損しているが、表裏2面に使用痕が認められる。

18は鉄鏃で先端を欠損しており、形態は不明である。19は鉄鎌で基部の部分と刀先端部は欠損している。

時期　床面出土の須恵器は提瓶1点で、TK209新段階に相当する。その他埋土中より出土した坏蓋（12）・坏身（13，14）も同時期である。土師器は床面出土が3点あり、6・8はともに概ね7－8期併行期に相当するが、1は9期まで下る可能性がある。しかしその他の埋土中の遺物は6・8同様7－8期併行期に収まるようである。これらの編年の示す時期と重複関係からSA1は、7世紀前半～中頃の住居ではないかと想定される。

SA2（第6・10図、20－35）

位置　V12、V13、W12、W13グリッド

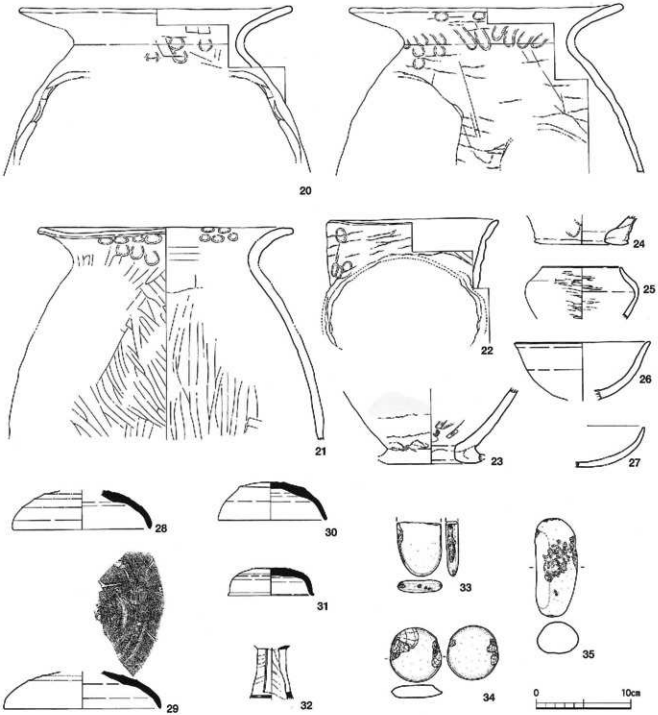
重複　SA1に切られる。

規模　長軸2.90×短軸（1.65）×深さ0.19m

形状　方形。

柱穴・周溝　不明。

遺構調査状況　遺構範囲はSA1同様、表土剥ぎの時点から平面上で確認できた。当初、長方形の住居跡かと思われたが東西の土層観察用ベルトで確認したところ2軒切りあっていることが判明した。遺物はSA1に比べ少なく、埋甕等の火処は検出されなかったが、それに代わるものとして竈形土器が床面より出土しているが、焼土・炭化物等は確認できなかった。



第10図　SA 2 出土遺物実測図（S=1/4）

第11図　SE 1 出土遺物実測図（S=1/4）

遺物　床面出土は20、29で他は埋土中より出土した。20は県内初出土の竈形土器である。器壁は水平方向の接合痕が明瞭であることからもまず通常どおり甕を形作った後、工具で成形しているようである。工具で正面（焚口）をドーム形に切り抜いて鍔面で一旦止め、そこから下に真直ぐ切り、側面・背面部分も切り抜き両側面は足のように成形されている。焚口の断面にはススが付着し、内面は全体に黒変している。21は甕だが、口縁の屈曲等が20と類似しており口縁部が分厚く長めである。他の遺物と比べて胎土も暗褐色で異質である。22の器形は小型甕だが、その正面頸部から背面胴部にわたって斜めに形成されている。おそらく成形した甕の底部を斜めに切り落とした後、その切り口にさらに粘土紐を貼り付け、成形したと思われる。20と同様に移動式竈の可能性が考えられる。しかしススの付着など使用した形跡はみられない。23は甑の底部で、底部を最初からドーナツ状に成形した後、上部を作成している。外面のススは下から6㎝の位置に帯状に付着している。25は模倣須恵器の壺で、内外ともにミガキを施し、丁寧なつくりである。

29は須恵器坏蓋で口径が16.6㎝と大きく肩部がなだらかなつくりである。天井部にヘラ記号を有す。

時期　床面出土の須恵器は坏蓋（29）1点で、口径よりTK209型式新段階に、その他埋土中より出土した坏蓋（30）も同時期で、29はTK209型式古段階に相当する。これより概ね須恵器はTK209型式内に該当するようである。土師器の床面出土は竈形土器1点のみで、概ね7－8期に相当すると思われる。埋土中の遺物もこの時期に収まるようである。これらの編年の示す時期と重複関係から少なくともSA2は、6世紀末～7世紀前半頃の住居ではないかと想定される。

SA5（第12～15図、38－63）

位置　W12グリッド

重複　SC2に切られる。

規模　長軸3.56×短軸3.5×深さ0.4m、12.5㎡

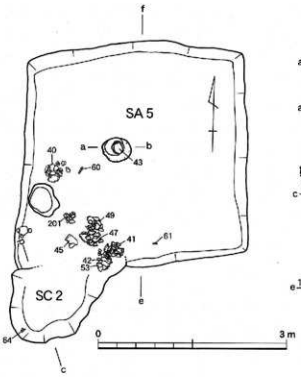
形状　方形。

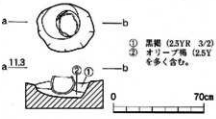
柱穴・周溝　不明。

遺構調査状況　埋土はオリーブ褐の砂質土で、しまりが弱く埋土中・床面付近でマンガン斑集積が見られ、特に東側に集中していた。住居内施設は埋甕が住居中央より検出されている。使用された甕（43）は球胴形で口縁部を打ち欠かれていた。土坑状に床面を掘り込み土器を設置し、床面よりわずかに土器上端部が突出している。その周囲より焼土や炭化物は確認できなかった。その他南西側にSC2が所在するが、この掘込を土坑として扱ったが単なる張り出し部の可能性がある。遺物は特に住居東側に集中して出土したが、床面直上の遺物は南西側、SC2付近に集中している他の遺構と比較して出土量が多く、また完形で同器形のものが多い。

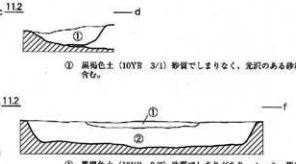
遺物　38－43、45、47、49、53、60、61は床面出土、他は埋土中である。

38－43は球胴形の甕である。口縁部の反り具合や胴部最大径の位置に若干ずれはあるものの、同器形である。しかし胎土に若干違いが見られ、41のみ橙色の胎土で他は黄橙である。40は外面頸部から底部にかけてススが付着し赤化している。表面が欠損している箇所も見られる。43は先述したが埋甕に使用されていた甕で口縁部を欠損している。外面は底部にスス状のヨゴレが付着しており、胴部は一部赤化している。44・45はわずかに外反する口縁部をもつ長胴形の甕で45は底部が高台状になる器形である。また外面はタタキによる成形を行っている。47は甕の底部で平底であり、底部付近に帯状にススが付着している。内外ともに縦方向の強い工具ナデを施している。48は浅鉢で、木の葉底を有す底部を持ち、大きく外方に開いて立ち上がり、口縁部は外反する。49－52は甑であ

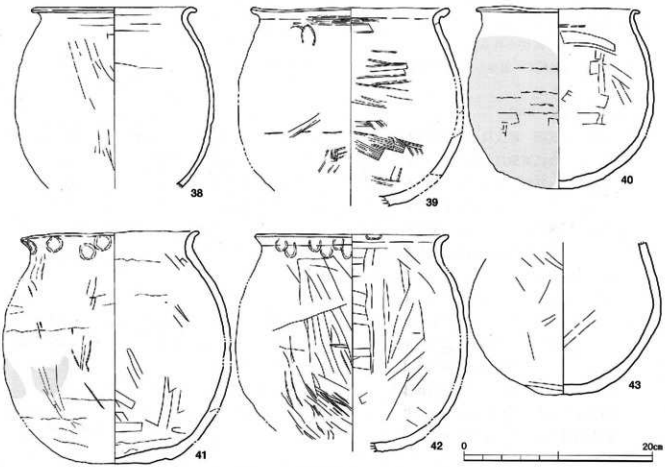




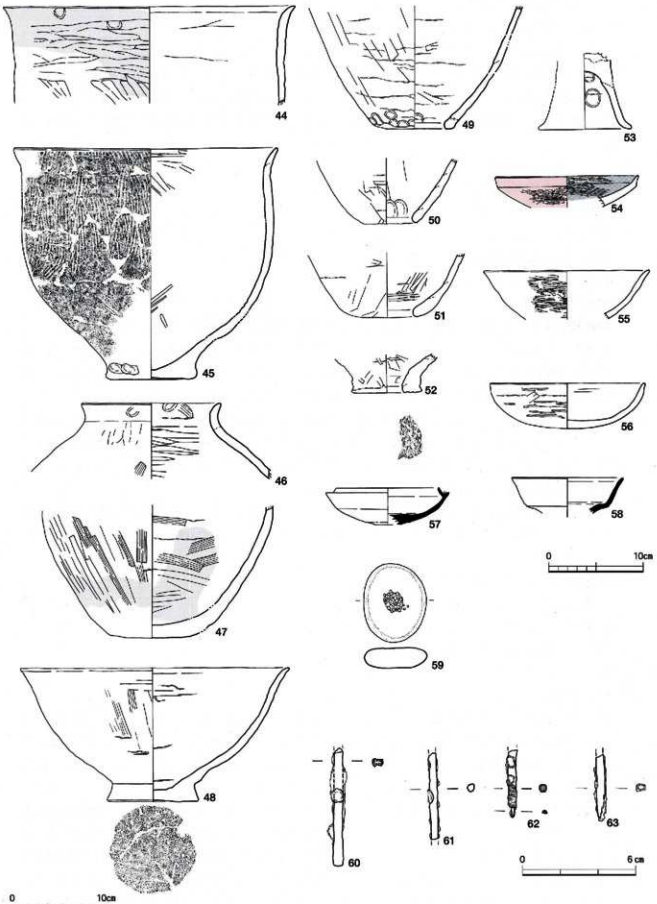
第13図　SA 5 埋甕平面図・土層断面図（S=1/30）



第12図　SA 5 ・SC 2 平面図及び遺物出土状況・土層断面図（S=1/60）



第14図　SA 5 出土遺物実測図 I （S=1/4）



第15図　SA５出土遺物実測図Ⅱ（60−63はS＝1/2、他はS＝1/4）

る。52以外は薄手で橙色の胎土である。52は甕を形作った後、底部中央を刳り貫いて成形している。
57は須恵器坏身で、薄手で口縁部の断面が三角形に近くなっている。
60－63は鉄鏃の破片で、62は木質が残っている。

時期　須恵器は埋土中のみの出土である。57の坏身は口径約11cmでTK217段階に相当し、蓋（58）も概ね同時期でよいと思われる。土師器は床面出土の遺物は概ね７－８期併行期に相当する。これらの編年の示す時期と重複関係からSA５は、６世紀末～７世紀前半頃の住居ではないかと想定される。

SA３（第22・24図、80－84）

位置　V11、V12、W11、W12グリッド

重複　SA９に切られる。

規模　長軸4.36×短軸（2.92）×深さ0.20m

形状　方形。

柱穴・周溝　不明。

遺構調査状況　平面上で南側の隅が確認された。SA３は西側に遺構面が広がるため調査範囲を一部拡張し、検出を試みた。しかし西壁の立ち上がりを確認することができず、再度東西セクションの確認・遺構面の精査を行った結果、もう１軒の住居跡（SA９）に切られていることが判明した。遺物量はSA９よりも少なく、住居南西側に集中し出土している。

遺物　全て床面出土であるが、80、81の土師器甕はSA９埋土中出土の遺物と接合しており、混在しているようである。80－82は土師器甕で、胴部が球形を呈するもの（80）、胴部最大径が下部になり長胴形を呈し、底部は平底気味の丸底（81）、口縁端部がゆるく外反するもの（82）がみられる。
84の須恵器坏蓋は天井部にヘラ記号を施している。

時期　須恵器の坏蓋は口径が約14cmで、TK209型式古段階に相当する。土師器は６期－７期に概ね相当する。これらの編年の示す時期と重複関係から６世紀中～末頃の遺構ではないかと推定される。

SA９（第22・23・25・26図、85－104）

位置　V11、W11グリッド

重複　SA３を切る。

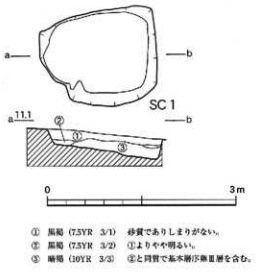
規模　長軸5.56×短軸（3.18）×深さ0.25m

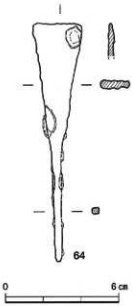
形状　方形

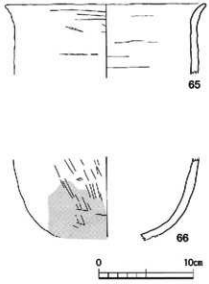
柱穴・周溝　不明。

遺構調査状況　SA３の北西側の立ち上がりを検出するため西側に拡張した際、SA３を切る住居跡が南北土層断面より確認された。SA３に比べ埋土中より多くの土師器片が出土した。住居施設は埋甕が住居西側より検出，土坑状の掘込みに設置されており、床面上５cmほど土器の上端部が露出していた。

遺物　85－90、92－98、102、103は床面出土、他は埋土中である。また、埋土中より鉄滓（第23表、711）が出土している。85－91は甕で、86は強い縦方向の工具痕が胴上部と底部付近にみられる。また全体的に赤化し外面にススが付着している。88は埋甕として使用された長胴形甕で，口縁部はほぼ水平に打ち欠いており，外面の底部～胴部最大径付近までススが付着、それより上は赤化している。96は高坏で、坏部は椀状タイプで粘土継目を明瞭に残す粗雑なつくりである。裾部の設置面には木の葉底の痕跡が残っている。最初から脚状に成形したのではなく、外形を成形した後、工具で

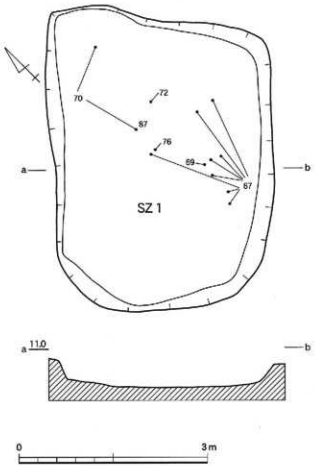




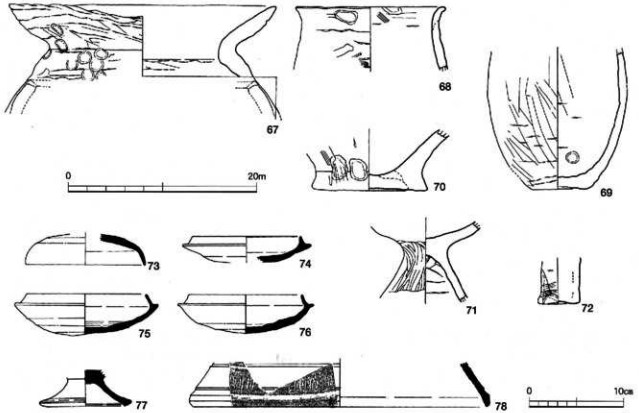


第16図　SC 1 平面図・土層断面図
(S=1/60)

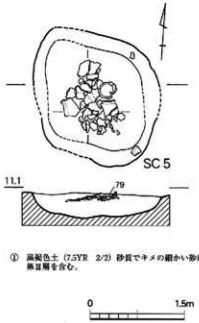
第17図　SC 2 及びSC 1 出土遺物実測図
(64　S=1/2，他はS=1/4)



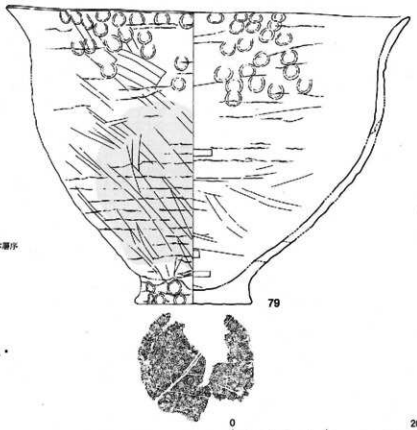
第18図　SZ 1 平面図及び遺物出土状況・土層断面図 (S=1/60)



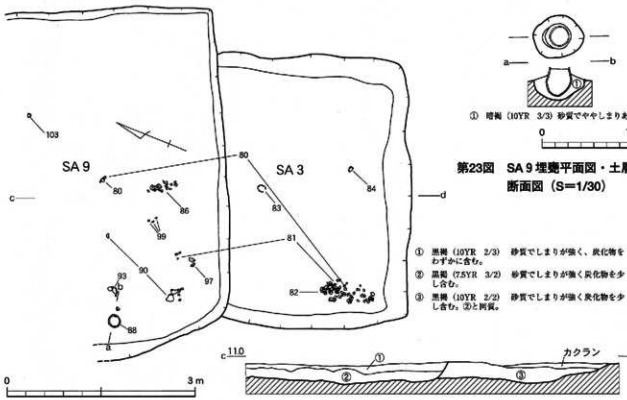
第19図　SZ１出土遺物実測図（S=1/4）



第20図　SC５平面図及び遺物出土状況・土層断面図（S=1/60）

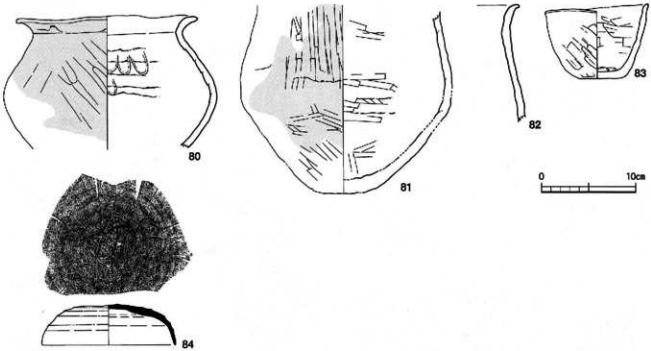


第21図　SC５出土遺物実測図（S=1/4）

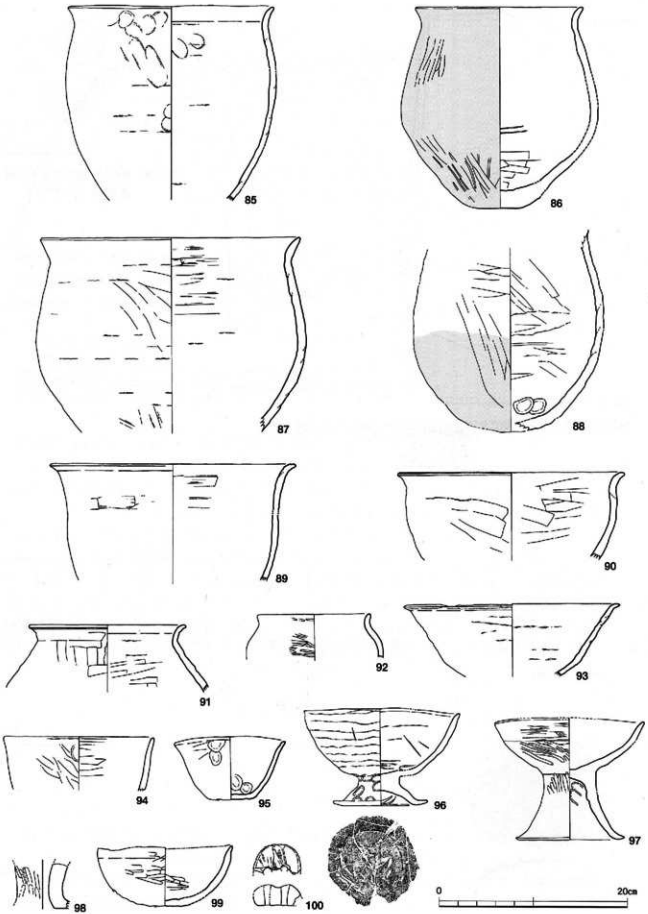


第23図　SA 9 埋甕平面図・土層断面図（S=1/30）

第22図　SA 3 ・ 9 平面図及び遺物出土状況・土層断面図（S=1/60）



第24図　SA 3 出土遺物実測図（S=1/4）



第25図　SA９出土遺物実測図Ⅰ（S=1/4）

第26図　SA９出土遺物実測図Ⅱ（S=1/4）

内部中央の粘土を掻き削ったのだろう。99は椀で外面の一部、内面全体が黒変しており、その上からミガキを施しているようにみえるが風化のため判別できない。

100は陶器錘で抉りが縦に２列あり、半分欠損している。山崎下ノ原第１遺跡の出土例からおそらく穿孔は４つあると思われる。時期は中世以降と思われ、混入したものであろう。

101－103は須恵器である。101の坏蓋は口径11.5cmで、102は高坏の脚部で三方透かしを施している。103は甕で器壁が薄く、外面はタタキのちカキ目、内面に同心円タタキが全体にみられる。104は砂質の礫石で、正面中央に敲打痕が１か所あり、下部を欠損している。

時期　須恵器の坏蓋は前述とおり口径が約11.5cmで、TK209－217型式古段階に相当する。土師器は概ね７－８期に相当する遺物だと思われる。95の鉢はSA３でも同器形が出土しており、７期に位置づけている。これらの編年の示す時期と重複関係から６世紀末～７世紀前半頃の住居ではないかと推定される。

SA７（第26～29図、105－117）

位置　W10、X10グリッド

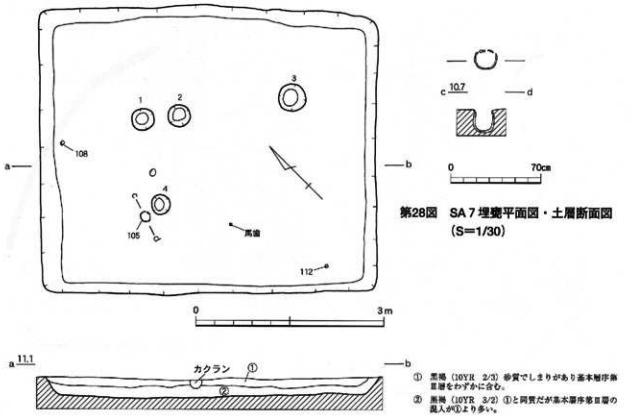
重複　なし。

規模　長軸5.34×短軸4.56×深さ0.30m、18.5㎡

形状　長方形。

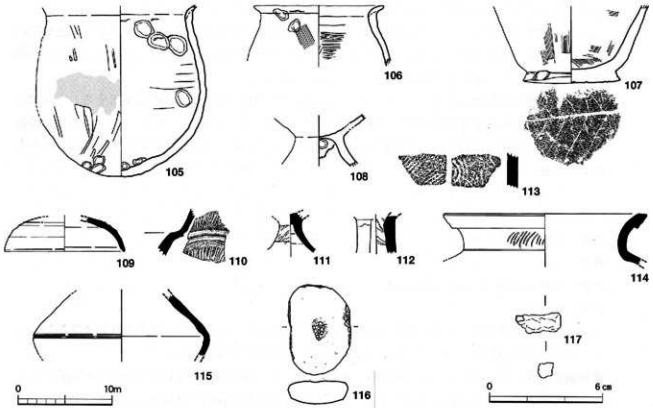
柱穴・周溝　４基検出。１：長径0.36×短径0.34×深さ0.3m、２：長径0.34×短径0.32×深さ0.17m、３：長径0.44×短径0.42×深さ0.15m、４：長径0.30×短径0.30×深さ0.18m。

遺構調査状況　切り合いのない単体の住居跡で、柱穴が４基検出されているがその位置は偏在しており、主柱穴の可能性は低いと思われる。住居内施設は埋甕が住居の対角線上、西隅付近で出土した。床面付近を精査した際、円形の黒色埋土を確認、掘り下げたところ埋甕を検出した。埋土は黒



第28図　SA７埋甕平面図・土層断面図
（S=1/30）

第27図　SA７平面図及び遺物出土状況・土層断面図（S=1/60）



第29図　SA７出土遺物実測図（117のみS=1/2、他はS=1/4）

色砂質土で、掘り込みの断面形はピット状で、土器は口縁部の打ち欠き等は行われておらず完形である。土器の上端部は床面とほぼ同じレベルである。その他に西側、床直面上より馬歯の一部が出土している。

遺物 105、107、108、112は床面出土、他は埋土中である。105は埋甕に使用した長胴形甕で、内外面共に口縁～頸部に帯状にスス状のヨゴレが付着している。

109－115は須恵器で109の坏蓋は口径12.6cmであり祖その形態からTK209型式と推定される。112は高坏の脚部片で三方透しが施されている。113は甕の胴部片だが、未焼成なのか胎土は磁器化しておらず風化している。114は甕で頸部に斜方向の櫛描文を施している。

116は砂質の敲石で、正面・上部・両端の4か所に敲打痕がみられる。

117は刀子の破片で、破片全体に木質が付着している。

時期 時期判定が可能な遺物として須恵器、土師器がある。まず須恵器だが、床面出土の高坏脚部（112）は小破片で時期を特定するのは厳しい。埋土中の遺物に目を向けると坏蓋（109）は口径13cm前後とTK209型式古段階の時期に位置づけられる。他の埋土中の須恵器も概ねこの時期に相当する。土師器は、床面出土の甕が2点あり、両方ともに概ね7－8期に相当し、これらの編年の示す時期から6世紀後半～7世紀初頃の住居ではないかと思われる。

SA 6（第30～33図、118－153）

位置 X10、Y10グリッド

重複 SA 4を切る。

規模 長軸4.32×短軸4.12×深さ0.25m、11.2㎡

形状 正方形。

埋土 黒褐色。砂質で、しまりがある。炭化物を少し含む。

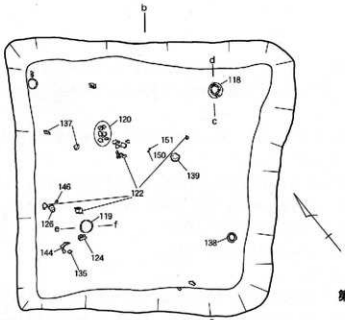
柱穴・周溝 不明。

遺構調査状況 平面上でプラン、断面上で立ち上がりを確認し掘り進めたが、埋土中の遺物量が多く、しかも刀子・完形の坏身・坏蓋等墓の存在を思わせる遺物が出土し困惑した。そのため他の遺構が重複している可能性も考えられるので再度確認を行ったが、切り合い等見当たらなかった。住居内施設は埋甕が四隅の対角線上に二基検出された。1基は東側隅、もう1基は西側隅に所在し、いずれも掘り込み断面形はピット状である。東側隅の埋甕に使用された甕（118）は完形で、頸部付近まで床面上に露出していた。ススはその露出していない頸部より下全体に付着している。西側隅の埋甕に使用された甕（119）は口縁部を打ち欠いており、土器上端部が床面よりわずかに突出する。

遺物 118－122、124－126、130、133－138、144、146－148は床面出土で、他は埋土中である。

118、119の長胴甕は埋甕に使用されたもので、118は東側、119は西側で検出した。118は口縁部が直立気味に立ち上がり口縁端部は緩やかに外反し、頸部がすぼまり底部が丸底気味の甕である。外面胴部～底部付近はススが付着し、内面は口縁部付近が一部赤化している。119は口縁部を打ち欠いており胴部最大径が中央で、底部は平底である。外面はスス・ヨゴレが胴部中央付近まで付着し、内面は底部が黒変している。122は甕で、口縁部はわずかに外反し、胴部は筒状で底部が極端にすぼまり高台状を呈す平底である。内外面とも強い工具ナデにより成形している。外面は全体的に赤化しており、胴部～底部にススが付着し、内面は底部付近が黒変している。123はタタキを全体に施した甕で、128の高坏は脚部にハケメを施した後、ヘラ状工具で格子目状の文様を刻んでいる。

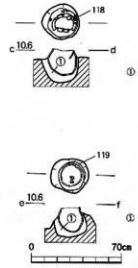
132－144は須恵器である。135・139の坏蓋・坏身にはヘラ記号が刻まれている。135の坏蓋は天井部に重ね焼きのためか楕円状の焼きムラがあり、そこに粘土の付着、欠損がみられる。133は口縁部



① 黒褐（10YR 2/1）砂質で土器小片を少し含む。1～2cm程度の炭化物をわずかに含む。

② 黒褐（10YR 2/2）砂質で炭化物をわずかに含む。ブロック状の基本層序第Ⅱ層を含む。

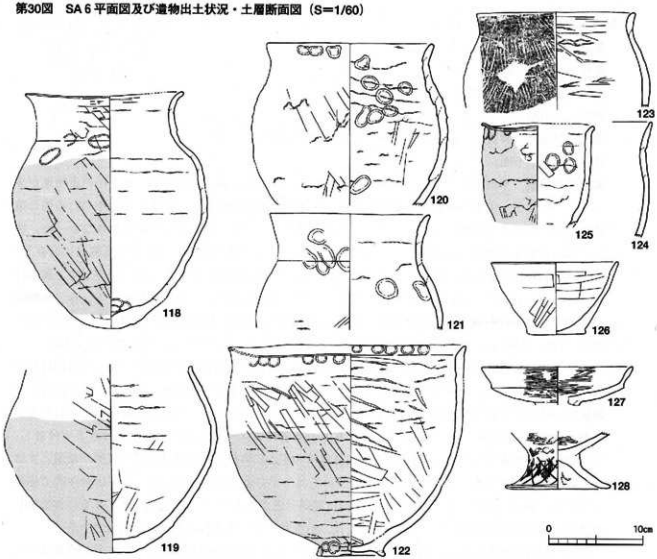
第30図　SA 6 平面図及び遺物出土状況・土層断面図（S=1/60）



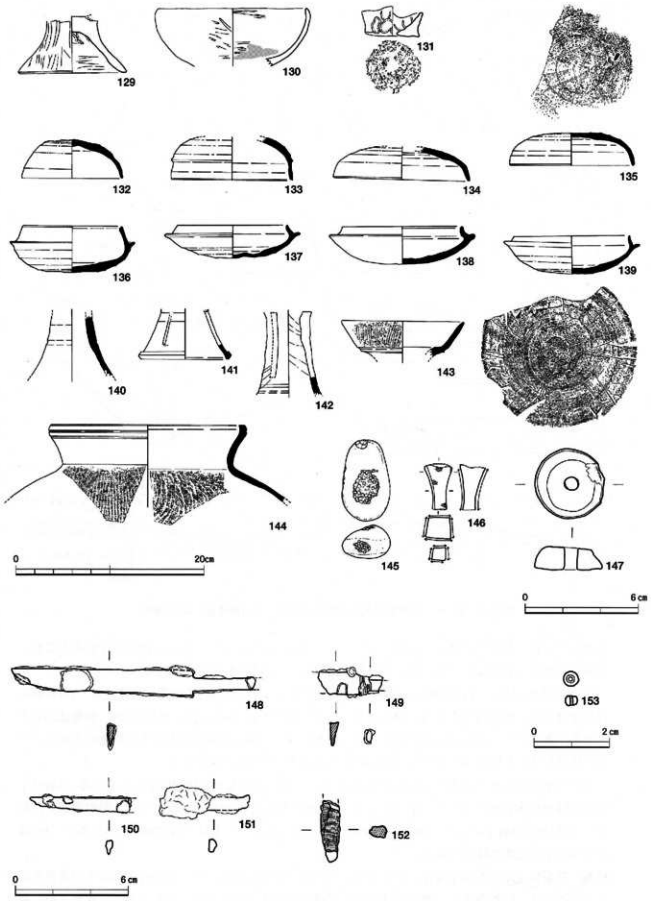
① 暗褐（10YR 3/3）砂質でややしまりあり。

① 黒褐（10YR 3/1）砂質でややしまりあり。

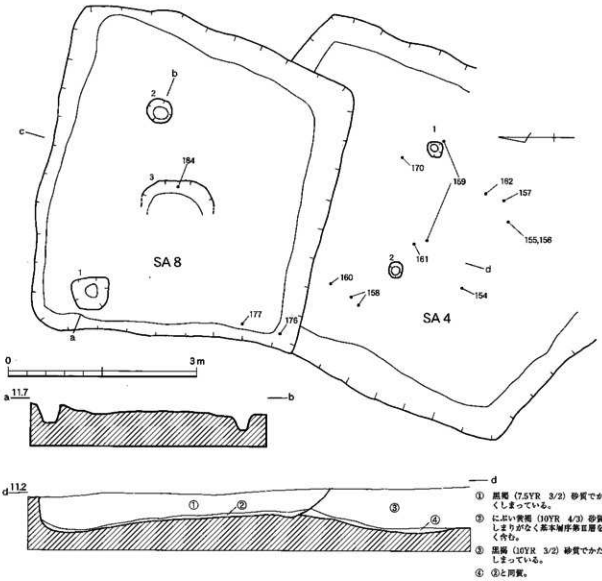
第31図　SA 6 埋甕平面図・土層断面図（S=1/30）



第32図　SA 6 出土遺物実測図Ⅰ（S=1/4）



第33図　SA 6 出土遺物実測図Ⅱ（147－152はS＝1/2、153はS＝1/1、他はS＝1/4）



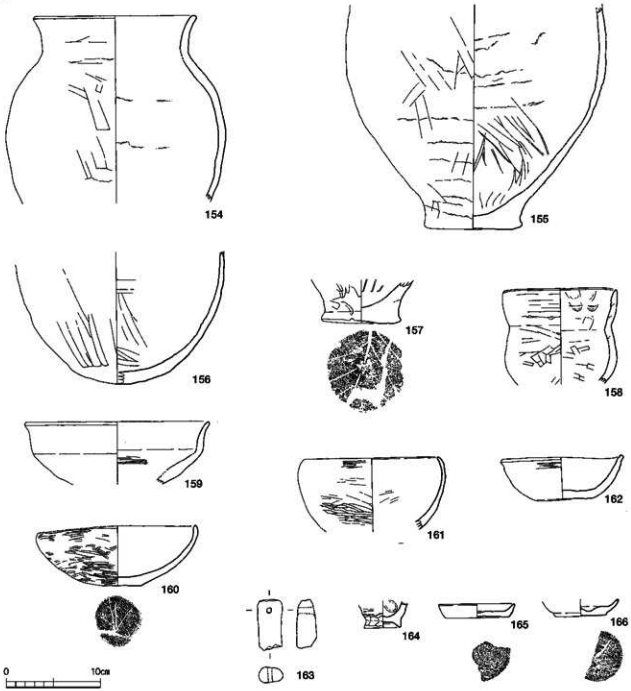
第34図　SA４・８平面図及び遺物出土状況・土層断面図（S=1/60）

が外反し、口唇部・肩部ともに段をもつ坏蓋で、136は立ち上がりが高く口唇部に段がある器形で133と同時期と思われる。138は焼成があまく風化しており調整が不明瞭である。

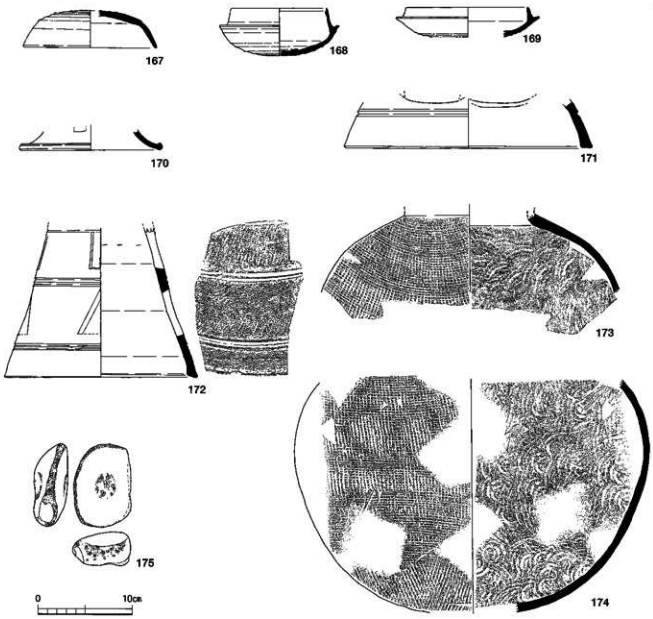
145－148は石器で、145は敲石、146は砥石で上下欠損しており側面４面使用している。147は滑石製の紡錘車で、断面台形を呈す。最大径3.7cm、最小径2.5cm、器高1.2cm、孔径0.7cm、重量は28ｇをはかる。ところどころに石の摂理による割れがみられ、広面と狭面に面的な光沢が認められる。中央孔周辺にはかき傷がついており、孔内部には縦方向に削り跡がみられる。

148－152は鉄製品である。148は刀子の完形で、刃部・背部ともに関がつくられている。149は丁度関の部分に木質が付着しているためつくりが同様か判別しづらいが、軟エックス線で確認した結果、関は148と同様であった。150は先端部分のみ残存しており、刃部の幅は他に比べて狭い。153はガラス玉で半透明の緑色である。

時期　時期判定が可能な遺物として須恵器、土師器が挙げられる。その中から床面出土の遺物をみると須恵器は二時期存在し、TK47－MT85型式併行期段階と思われる。また土師器は概ね６期に相当し、これらの編年の示す時期と重複関係から少なくとも６世紀前半～中頃の時期に相当する。



第35図　SA 4 出土遺物実測図Ⅰ（S=1/4）



第36図　SA４出土遺物実測図Ⅱ（S=1/4）

SA４（第34～36図、154－175）

位置　X９、X10、Y９、Y10グリッド

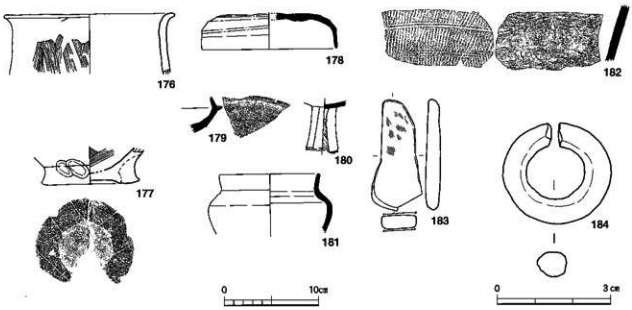
重複　SA６、８に切られる。

規模　長軸（6.12）×短軸5.39×深さ0.45m、（22.9）㎡

形状　方形

柱穴・周溝　柱穴２基検出。１：長径0.27×短径0.25×深さ0.2m、２：長径0.26×短径0.20×深さ0.15m

遺構調査状況　SA６・８の間に位置する。平面上でみると基本層序第Ⅲ層との区別が不明瞭である。埋土は南北土層断面でみたところ、北側（SA８側）は黒くしまっているが、南側に向かうにしたがって、基本層序第Ⅲ層の混じりが強くなっている。このことから南側の壁が崩落した後、埋没して



第37図　SA 8 出土遺物実測図（184のみS＝1/1、他はS＝1/4）

いった可能性がある。住居内施設は柱穴が２本みられ、主柱穴２本の住居と考えられる。遺物はSA８出土遺物と遺構間接合しているものもみられ、遺物が若干混在しているようである。

遺物　床面出土は155－158、161、170で、他は埋土中である。155，157は平底の甕で157は木の葉底を有す。154、156の丸底甕と比べて若干時期は下る。いずれも工具ナデ成形である。158は小型丸底壺で口縁部がやや外反する器形である。161は椀で、口縁部が内湾する器形である。165、164は土師皿でいずれも中世以降のもので流れ込みであろう。

167－174は須恵器である。168の坏身は口縁部に段を持ち、やや内傾する高い立ち上がりで底部は球形に近い。170は高坏脚部で、裾端部は屈曲し肥厚させている。171、172は器台で、時期幅が大きく、173、174は同一個体と思われる横瓶である。破片資料のため器形的には小型の甕と思われた。しかし、頸部付け根がやや直立する器形で、外面の調整はタタキのち丁寧なカキ目を施すなどの特徴から横瓶と判断した。

時期　時期判定が可能な須恵器・土師器、いずれも二時期に分かれる。須恵器は、床面出土である高坏裾部片（170）がTK209型式新段階で、埋土より出土した坏身（169）、器台（172）が概ね同時期である。他の埋土中より出土している坏蓋（167）、坏身（168）、器台（172）、横瓶（174）はTK208－TK47併行期に該当しており、この二時期はかなりの時期幅がある。土師器の床直遺物も４－５期、８期の二時期が混在する。住居跡の重複関係も含めてどちらの時期が妥当であるかというとTK208－TK47併行期、４－５期の遺物が住居の時期に合致する遺物と考えたほうが自然であり、これらの編年の示す時期、少なくとも５世紀後半～６世紀前半頃の時期に相当すると思われる。

SA 8（第34・37図、175－184）

位置　X９、Y９、Y10グリッド

重複　SA４を切る。

規模　長軸4.90×短軸4.05×深さ0.36m、15.1㎡

形状　方形

柱穴・周溝　3基。1：長径0.53×短径0.5×深さ0.28m、2：長径4.0×短径3.8×深さ0.22m、3：長径1.3×短径（0.5）×深さ0.18m

遺構調査状況　方形の住居跡で、住居内施設は柱穴が3基検出された。耳環が1点、住居中央より出土しているが中央柱穴に伴っておらず、その上のレベルの住居埋土からである。

遺物　176、177は床面直上の遺物で、他は埋土中より出土した。176は口縁端部がわずかに外反する長胴形の甕である。177の甕底部は木の葉底を有する平底で、中央が凹んでおり蛇の目状の底部を形成する。

178の須恵器坏蓋は口径14.2㎝でTK209型式古段階に相当する。179の坏身は立ち上がりがやや短く内傾する。181の短頸壺は口縁端部を丸くつくり、口縁部はわずかに外反し、肩部の張る器形である。

184の耳環は鉄地金銅張で、SA40出土の耳環より太目である。

時期　時期判定が可能な遺物として須恵器、土師器があるが、床面出土の須恵器はなく、埋土中より出土した坏蓋（178）が、TK209新段階に相当する。また土師器は床面出土が2点あり、両方ともに概ね7－8期併行期に相当し、これらの編年の示す時期と重複関係から少なくとも7世紀前半～中頃の住居ではないかと想定される。

（2）不明遺構（SZ）

SZ1（第18・19図、67－78）

位置　W11、W12グリッド

重複　なし。

規模　長軸4.62×短軸3.5×深さ0.32m、10.5㎡

形状　不定成形。

柱穴・周溝　不明。

遺構調査状況　平面・断面上でプランを確認後、掘り始めた際に、南東隅より馬歯（奥歯）、須恵器無蓋高坏脚部が出土した。当遺跡のすぐ南側、山崎下ノ原第1遺跡の古墳時代の墓域からは古墳に付随する馬埋葬土坑が検出されているので、同様に土坑検出の可能性もあると思われた。しかし発掘調査を進めていくうちに馬歯の一部（奥歯）が他の住居跡からも出土し始めたので、この集落にみられる祭祀もしくは風習の可能性もある。古墳時代に住居跡より馬歯・骨の出土した遺跡は、群馬県太田市西長岡宿遺跡で火事後の住居跡に馬の上下の顎骨が入れられた状態で出土した例があるが、この住居跡は河原に掘られたものでやや特殊な例である。その他、住居跡以外では水辺で馬の歯や骨の一部が出土した遺跡が見られるが、雨乞い等水に係る祭祀で馬を犠牲にした痕跡ではないかといわれている。当遺跡の馬歯が同様の祭祀的意味合いとは出土状況の違いもあり考えにくいが、隣接する山崎下ノ原第1遺跡では、古墳の傍に馬を馬具とともに埋葬する等、馬を用いた儀式的な行為が行われているのを考えると、この遺跡でも何らかの儀式に馬を用いた可能性は十分に考えられる。この遺構は四隅がはっきりせず、カクランで不明瞭な部分が多かったため住居跡である可能性が持てず、調査時の遺構名称はSZ（不明遺構）1とした。しかし、遺物のセット関係等から住居である可能性が高いと考えている。

遺物　遺物は遺構内東側に集中し出土している。67、69、70、72、76は床面出土、他は埋土中である。67は竈形土器の口縁部で、体部下半は欠損している。頸部付け根で口縁部が外方に開く器形で

器壁は分厚く、継目が明瞭でゴツゴツしており粗雑なつくりである。最初に甕を形作った後、正面（焚口）の頸部下から工具で切り込みを入れこの形に成形しているようである。68、69は小型長胴甕である。69の外面には焼成時の欠損、使用時の欠損などがみられる。72は支脚と思われる棒状の器形で、底部はユビでつまみ出し、やや広げるよう成形している。胎土は通常甕に用いるものと同じである。

73－78は須恵器で、床面出土は76の坏身のみである。口径11.8cmで、TK43型式の時期に相当する。78は甕の口縁部と思われるが器台の可能性も考えられる。

時期　時期判定が可能な遺物として須恵器、土師器がある。まず須恵器だが、床面出土の坏身（76）の時期に概ね相当する。また土師器は床面出土が2点あり、両方ともに概ね7期に相当し、これらの編年の示す時期から6世紀後半～末頃の遺構ではないかと想定される。

（3）土坑（SC）

SC1（第16図、65、66）

位置　V12グリッド

重複　なし。

形状　不定成形。

遺構調査状況　土師器小片が埋土中に散在していたが、床面出土はみられなかった。

遺物　甕（65）はわずかに外反する口縁部をもち、胴部は張り出さず、バケツ状の器形を呈する。66は球形胴甕の底部で、外面にススが付着している。

時期　時期決定の判定となる遺物は65・67の土師器2点だが、これら埋土中の遺物の時期は7－8期に概ね相当し、6世紀末～7世紀前半の土坑と思われる。

SC2（第12・17図、64）

位置　W12グリッド

重複　SA5を切る。

規模　長軸（1.5）×短軸1.3×深さ0.28m

形状　不定円形。

遺構調査状況　当初SC2に気づかずSA5を掘り下げていたため、出土遺物がSA5出土遺物に混在しているおそれがある。埋土は基本層序第Ⅲ層と類似しており平面からの検出が難しく、SA5の南壁でその立ち上がりを確認できた。SA5の張り出し部の可能性がある。レベルの違いは床面はマンガン斑の集積がみられた。遺物は土師器片が埋土中、完形の方頭鏃が出土した。方頭鏃は床上10cmの南側の壁に鏃身部が突き刺さった状態であった。

遺物　方頭鏃（64）は茎部の断面形は方形、関は持たず、鏃身は扁平で刃部に向かって末広形となる形状である。鏃身長は12.5cm、16.0gと大きい。

時期　鉄鏃はTK209型式の時期に概ね相当すると思われ、SC2の時期はSA5とほぼ同時期の6世紀末～7世紀初頃と思われる。

SC5（第20・21図、79）

位置　X11グリッド

重複　なし。

規模　長軸2.1×短軸2.0×深さ0.36m

形状　不定円形。

遺構調査状況　遺構の有無を確認するため、X11グリッドに入れた東西のトレンチにより検出できた。土坑の中央より、1個体分の大型長胴形甕が破損した状態で出土している。

遺物　79は埋土出土の甕である。底部は木の葉底を有する平底で、底部付近から外方に向かって胴部は大きく開き、一旦胴部中央で直立するが再び口縁部は外方に大きく開く。底部径と口縁部径の差が大きく、底部が高台状にすぼまるアンバランスな大型甕である。

時期　遺物は79の甕1点のみだが、この遺物の時期は7期に概ね相当する。

（4）溝状遺構（SE）

SE1（第6図、36，37）

位置　V12グリッド

重複　SA1に切られる。

規模　残存長2.21×幅0.42×深さ0.26m

断面形状　やや深いⅢ状を呈す。

遺構調査状況　SA1の北壁に残っていた断面から立ち上がりを確認し、検出を行った。埋土はしまりのある黒褐色の砂質土で、炭化物は含まれていない。走行方向は南北で、北側に延びる溝は、途中より東へ方向を転換するがその後、北端は消失しており不明である。南端は平面上で遺構に気づかず、先にSA1・2から掘り下げたため不明であるが、SA1・2の中央に設定していた東西土層断面、そしてSA1の南壁にSE1の立ち上がりは確認できず、住居内の埋土に掘り込んだ形跡がないことからSA1に切られたと思われる。

遺物　遺物は少なく、床面の遺物は検出できなかった。掲載2点とも埋土中出土である。

36は椀で口縁端部がわずかに外反する平底の鉢である。外面に胴部から底部中央に向かって強い工具ナデを施されている。37は須恵器坏蓋で、天井部にヘラ記号？を有す。口径12cm前後でTK209型式新段階と思われる。

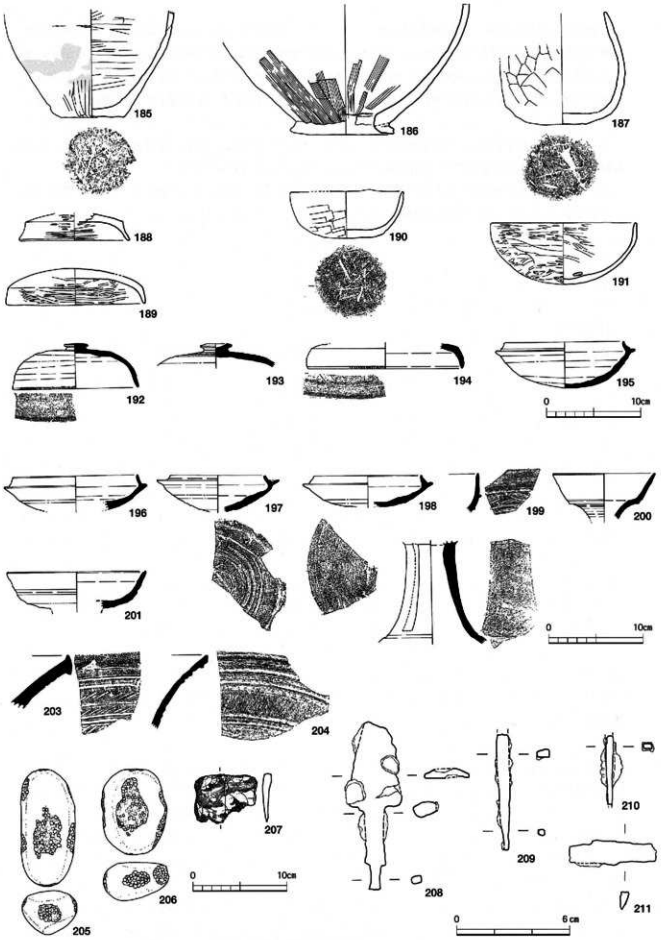
時期　床面出土の遺物がなく、いずれも埋土中の出土である。須恵器は坏蓋（37）1点で、口径よりTK209型式新段階に相当することは前述した。土師器の鉢（36）は、概ね7－8期に該当すると思われる。二つの編年の示す時期と重複関係から、7世紀初頃の溝と推定される。

（5）B－1区包含層出土の遺物（第38図、185－211）

主に基本層序第Ⅱ層～第Ⅲ層上面で出土しており、分布は住居跡の分布と同一である。以下、遺物の説明を述べる。

185は甕の底部で木の葉底を有する平底である。186は甑で穿孔は成形後に刳り貫かれたものである。胎土は精製されておらず、甕の胎土に近い。187は鉢で、内外面に赤彩塗布を施している。外面は工具で粗く削っている。底部は木の葉底である。188、189は模倣須恵器の坏蓋で、いずれも内外面に赤彩塗布を施している。190の坏は器形が厚めで口縁部は外反し、底部は平底である。底には工具痕がみられ、全体にはナデ調整を行っている。191の坏は薄手で口縁部はわずかに内傾するが、口縁端部は直立気味に立ち上がり、底部は丸底である。

192－204は須恵器である。192、193は有蓋高坏の蓋で、192は扁平なつまみをもち、口縁部に文様帯を有す。193のつまみは中央が凹む形状である。194は坏蓋で、口縁部に文様を施している。195－198は坏身で、195－196は復元口径12－14cm内で、TK209型式古段階－TK209型式新段階に相当する。



第38図　B－1区包含層出土遺物実測図（208－211はS=1/2、他はS=1/4）

197は復元口径10cm前後でTK209型新段階に相当する。198は11.5cm内であることから、TK209型式新段階－TK217型式古段階に相当する。201は無蓋高坏の坏部片で、やや外反しながら立ち上がる口縁部に沈線が入る。202は高坏脚部で、外面には櫛描波状文が密に施文されており、三方透かしが入る器形である。203、204は甕の口縁部で204は工具による文様帯を施し204は薄手で櫛描波状文を施文する。

205－207は石器で、205、206は敲石で全面使用している。207は左側面に抉りが入っており、石材も頁岩で擦痕が確認できることから破損した石庖丁の可能性がある。

208－211は鉄器で208は三角形鏃の鏃身で、209・210は鉄鏃の茎部、211は刀子片である。関部分のようにもみえるが、刃部・背部が欠損しているだけかもしれず不明である。

第39図　B－2区遺構分布図（S=1/300）

第2節　平成15年度調査分

B－2区の調査（第39図）

（1）住居跡（SA）

SA24（第40・41図、212－215）

位置　Y8グリッド

重複　SA27、SA33を切る。

規模　長軸（3.20）×短軸2.86×深さ0.35m

形状　調査区外に遺構が延びるため遺構全体の検出はできなかった。

柱穴・周溝　1基。長軸0.43×短軸0.43×深さ0.21m

遺構調査状況　SA24を切るSA33を掘り下げていた際、その床面付近から埋土の異なる一角があり、土層断面等確認したところSA33を切る住居跡であることが判明し、これらの土層を手がかりに平面上のプランを確定させた。住居内施設は柱穴1基のみの検出で主柱穴となるかは不明である。また、遺物量は他の住居跡に比べ少ない。

遺物　212、215が床面出土で、他は埋土中である。

212は甕の口縁部、213は平底の甕の器形だが、焼成前に底部中央が刳り貫かれており、甑と思われる。214は甕の底部で中央がやや凹み、木の葉底を有する。215は砥石で、全面使用しているが、下部は欠損のため不明である。

時期　時期判定の可能な遺物は土師器片三点のみである。そのうち床面出土の土師器甕口縁部片（212）は、概ね8期に相当すると思われる。埋土中の他の土師器もこの時期に収まるようである。これらの遺物の示す時期と重複関係から7世紀前半～中頃と考えられる。

SA27（第40・42図、216－222）

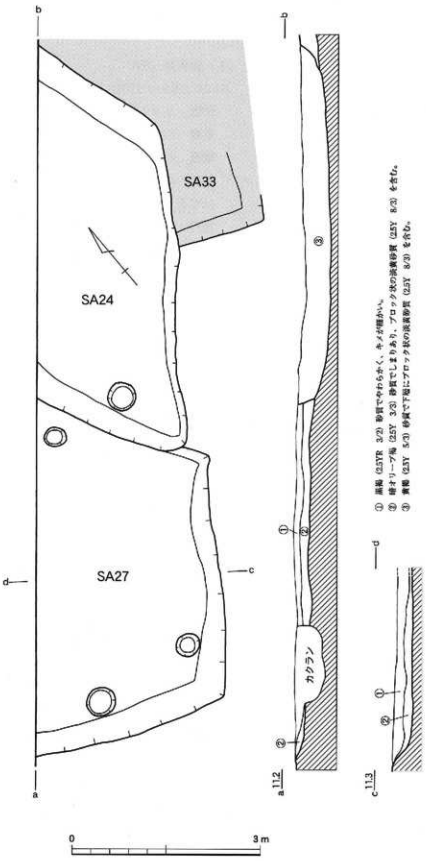
位置　Y8、Y9グリッド

重複　SA24に切られる

規模　長軸5.05×短軸（2.49）×深さ0.25m

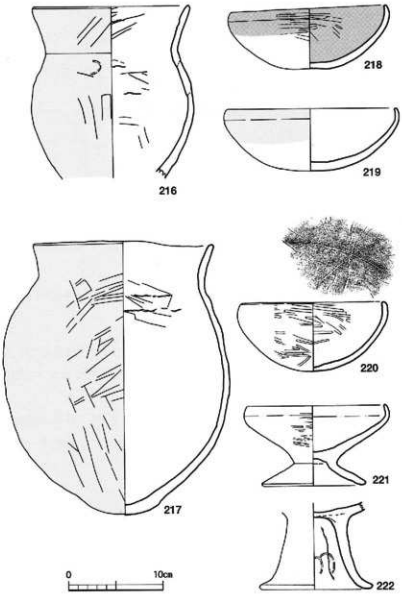
形状　方形。遺構が調査区外に延びるため遺構全体の検出はできなかった。

柱穴・周溝　3基。南側長軸0.46×短軸0.45×深さ0.3m、南東長軸0.4×短軸0.35×深さ0.17m、北西長軸0.35×短軸0.3×深さ0.21m



第40図　SA24・27平面図・土層断面図（S=1/60）

第41図　SA24出土遺物実測図（S=1/4）

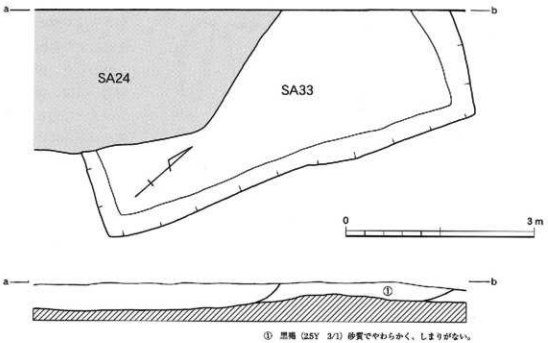


第42図　SA27出土遺物実測図（S=1/4）

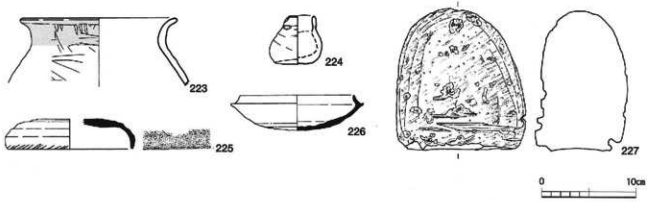
遺構調査状況　SA24を確認し、掘り下げを開始した際に、土層断面により南西側の立ち上がりを検出した。B－2地区のこの周辺一帯は、畑作によるカクランが入っており、平面上では遺構をつかみにくい状況であったため、SA24と同様、土層断面による遺構確認となった。住居内施設は柱穴を3基検出したが、遺構が調査区外に延び遺構全体の検出が困難であったため、主柱穴の認定については確定ではない。遺物量は他の住居跡に比べ少ない。

遺物　218－222は床面出土、他は埋土中である。

217は甕で口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁が若干外反し、底部は厚めで内面の底部中央はユビで凹ませてある。外面全体にはススが付着している。218－220は坏である。3点とも口縁が内傾する器形だが、218・219が平底で口径は16cm超、器高は7cm前後と大きい。218の坏は深めのやや平底の坏で、5－6期に相当する器形である。その内面は、口縁部付近は艶のある黒色層だがそれ以外はやや褐色気味の薄い黒色である。外面は一部風化し表面が剥落しているが、底部付近まで黒色処理が行われていたようである。口縁部付近には艶のある黒色層が施され、気泡状の細かい断文が認められる。黒色処理が確認できない底部付近には、一部赤彩塗布？が施されており、二色の表面処理を行っているようである。220は丸底で口径は



第43図　SA33平面図・土層断面図（S=1/60）



第44図　SA33出土遺物実測図（S=1/4）

16cm以下、器高は7cm超と深めの器形で、内面に×印のヘラ記号が施される。221・222は高坏で、全面にヘラミガキを施している。221の坏部は口縁が内傾し、裾部が大きく開いた脚部を呈す。222は裾部端部のみ外反する器形である。

時期　土師器は埋土中の遺物も含めて概ね５－６期、６－７期の二時期に収まるが、大半の遺物は５－６期に相当する。これらの遺物の示す時期と重複関係から少なくともSA27は、５世紀末～６世紀中と想定される。

SA33（第43・44図、223－227）

位置　Ｙ８、Ｚ８グリッド

重複　SA24に切られ、SA32を切る。

規模　長軸6.3×短軸（2.63）×深さ0.25m

形状　方形。

柱穴・周溝　不明。遺構が調査区外に延びるため遺構全体の把握ができなかった。

遺構調査状況　先に平面上で検出していたSA31・32の土層確認トレンチを入れたときにもう1軒、住居の立ち上がりを確認した。住居内施設は不明である。SA24・27と同様に遺物量は少ない。

遺物　床面出土は223、226で他は埋土より出土した。

223は甕の口縁部で頸部に工具痕が筋状に入る。224はミニチュア土器で、一塊の粘土で形作り、口縁部を最後に貼付けて成形している。

225・226は須恵器で、225の坏蓋は口径13.2cmで口縁部に斜方向に工具で施文している。226は坏身で口径12.8cmを計る。

時期　床面出土の須恵器は坏身（226）1点で、口径よりTK209型式新段階に相当する。その他埋土中より出土した坏蓋（225）も同時期である。土師器の床面出土は甕（223）1点で、今塩屋編年の概ね7期に相当すると思われる。これらの編年の示す時期と重複関係から、6世紀末～7世紀初頃と想定される。

SA31（第45・46図、228-236）

位置　Z7、Z8グリッド

重複　SA32、SA26に切られる。

規模　長軸5.4×短軸5.25×深さ0.25m、20.1㎡

形状　方形

柱穴・周溝　柱穴8基。1：長軸0.65×短軸0.67×深さ0.55m、2：長軸0.43×短軸0.30×深さ0.28m、3：長軸0.45×短軸0.4×深さ0.18m、4：長軸0.45×短軸0.35×深さ0.20m、5：長軸0.4×短軸0.37×深さ0.10m、6：長軸0.28×短軸0.25×深さ0.18m、7：長軸0.55×短軸0.55×深さ0.24m、8：長軸0.45×短軸0.45×深さ0.25m

遺構調査状況　住居内施設は柱穴が8基検出されている。主柱穴は不明である。調査区西側壁の土層断面では両側の住居跡から切られており、SA31の立ち上がりをフラットな層なので確認出来ず、検出が遅れた。最初東側のSA29の範囲を確定させる際、その確認トレンチにSA29を切る立ち上がりをつかみ、ようやくSA31は確定した。また、遺物量は少ないが土師器・須恵器等のほか馬歯が床面上より出土した。奥歯2－3本程度である。

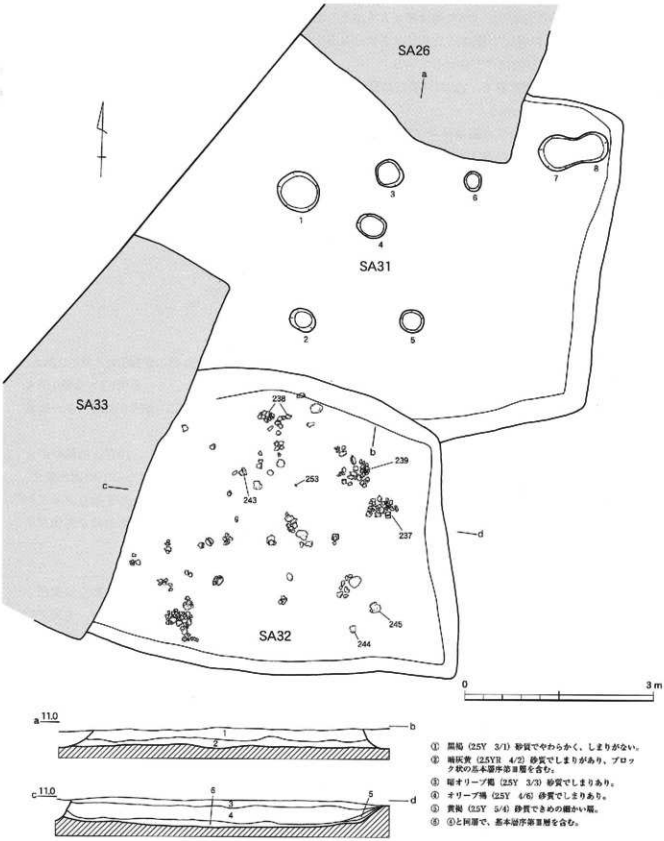
遺物　229－230、234は床面出土、他は埋土中である。

228の甕は、頸部で一旦直立し口縁部で再び外反する器形である。229は壺の底部で胎土は橙色を呈し、外面底部中央が凹む器形である。内外面ともに工具ナデを施している。230は坏で、丸底で口縁部が内湾する器形である。全体に横・斜方向のミガキが施されている。外面底部にはヘラによる線刻（×印）があり、全体にススが付着している。

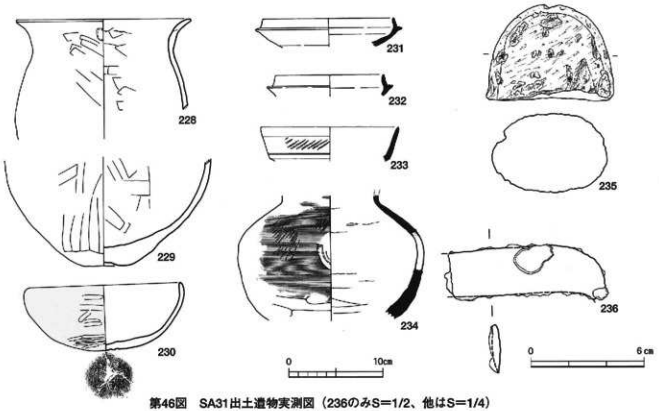
233は鼈の口縁部で10条の櫛先を斜めに突いて施文している。234は鼈の胴部でSA26の出土遺物と接合している。外面は風化のため不明瞭だが、肩部の施文は233と同様櫛状工具で行っている。235は軽石で、楕円形状に成形されており、下部を欠損している。236は鍾で、基部・刃先の先端を欠損している。

時期　床面出土の須恵器は鼈の胴部（234）1点で、その頸部の細さや調整等からTK209型式に相当する。その他埋土中より出土した鼈の口縁部も概ね同時期でよいと思われる。坏身（231）は口径14.0cmでTK209古段階、232は口径11.0cmでTK209新段階である。29はTK209型式古段階に相当する。これより概ね須恵器はTK209型式古段階－新段階に収まるようである。土師器の床面出土の遺物は概ね5－6期に相当、埋土中の遺物である甕（228）もこの時期に収まるようである。

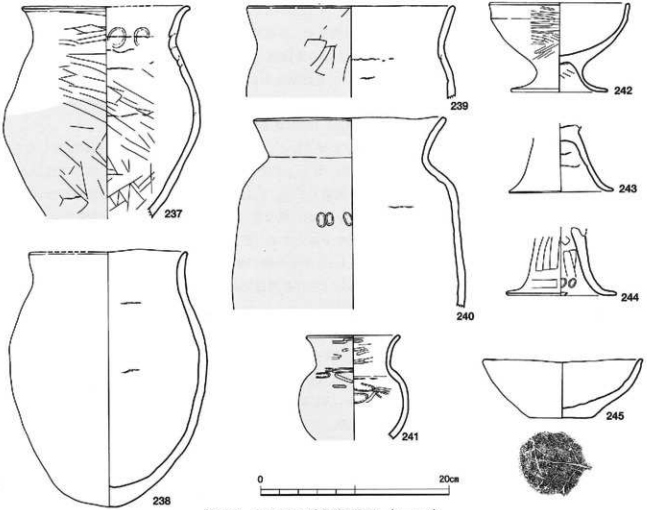
須恵器、土師器の示すこの二時期はかなりの時期幅がある。重複関係も考慮に入れるとSA31は、



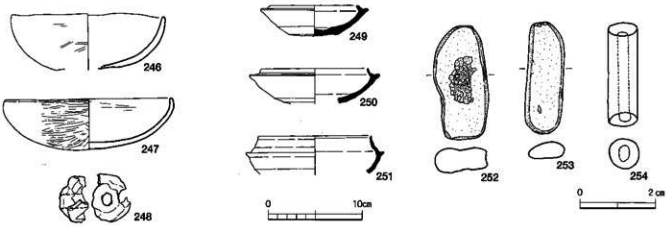
第45図　SA31・32平面図及び遺物出土状況・土層断面図（S=1/60）



第46図　SA31出土遺物実測図（236のみS=1/2、他はS=1/4）



第47図　SA32出土遺物実測図Ⅰ（S=1/4）



第48図　SA32出土遺物実測図Ⅱ（254のみS=1/1、他はS=1/4）

SA32（第45・47・48図、237－254）

位置　Z 8グリッド

重複　SA31を切り、SA33に切られる。

規模　長軸（5.0）×短軸（4.85）×深さ0.43m

形状　方形

柱穴・周溝　不明。

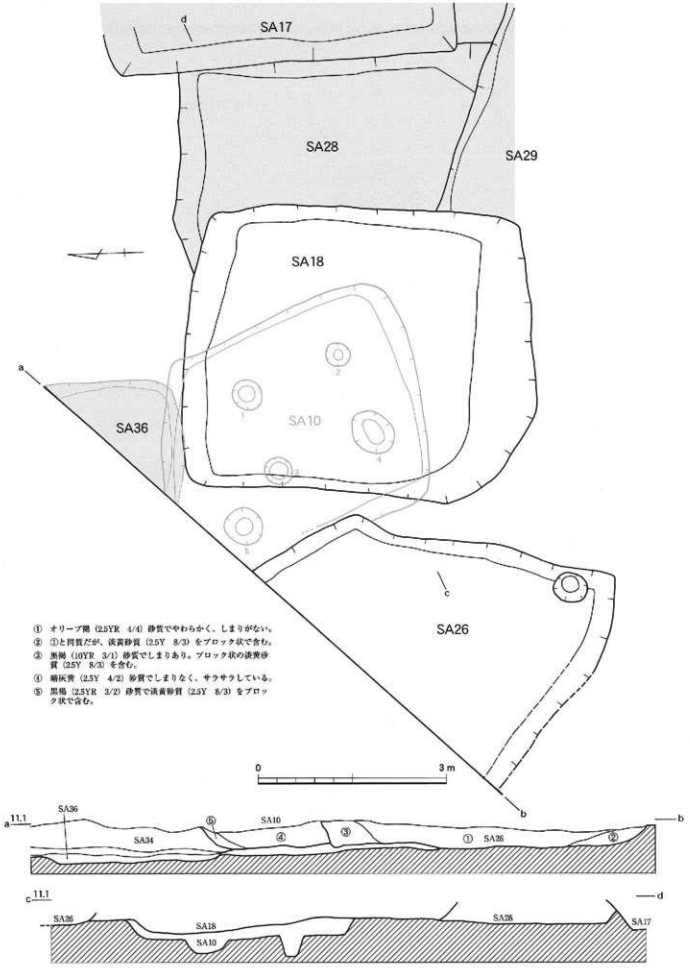
遺構調査状況　SA31よりさらに黄味の強い埋土で、基本層序第Ⅲ層との色彩が似ており色別が困難であったため、遺構輪郭はトレンチで立ち上がりを確認しながら確定した。住居内施設は不明である。SA31、33に比べ、遺物の出土量が多い。また埋土中より羽口（248）、管玉（254）等が出土している。

遺物　239、240、242－245は床面出土、他は埋土中である。

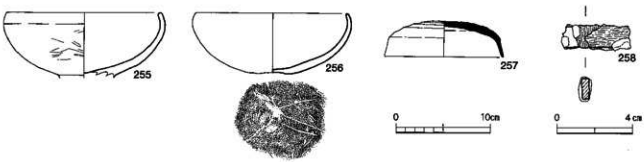
237は甕である。胴部下欠損部の割れ口が水平であること、スス・黒変の状況から甑に転用したと思われる。240は牛乳瓶形の肩部の張る甕で、頸部はすぼまり口縁部は逆ハの字風に外方に広がる。調整は風化・二次焼成による劣化のため不明瞭である。241は小型の壺、242－244は高坏で242は坏部が深いタイプである。245－247は坏である。245は甕の胎土に近い砂粒混じりで、厚手である。底部付近から外方に大きく開き口縁部近くでやや直立する。底部は木の葉底を有する平底で全体的に粗雑な印象を受ける。247は17.6cm、器高5.4cmと平形の碗である。248は羽口の先端で、外面全体がガラス質化し、一部鉄が付着している。249－251は須恵器坏身で、時期幅が広く、他の遺構から混入したと思われる。251はSA31の時期に整合するため、SA31からの流れ込みと思われる。

252は敲石で、三面使用している。254は緑岩製の管玉で、一点のみの出土である。

時期　須恵器はすべて埋土中の出土である。坏身（249）は9.12cmでＴＫ217新段階、250（坏身）は口径11.2cmでTK209型式新段階、251は口径11.9cmでその立ち上がりの高さ、口縁部に段を有する器形からTK208型式、とそれぞれ三時期あり、TK209新段階－ＴＫ217型式併行期に相当すると思われる。土師器の床面出土遺物は概ね５－６期、７－８期に相当し、二時期に分かれる。埋土中の遺物もこの二時期に分かれる。須恵器・土師器の示す時期と重複関係から６世紀中～末頃と推定される。



第49図　SA10・26・18平面図・土層断面図（S=1/60）



第50図　SA26出土遺物実測図（258のみS＝1/2、他はS＝1/4）

SA26（第49・50図、255－258）

位置　Z７グリッド

重複　SA10、SA31を切る。

規模　長軸5.05×短軸（2.8）×深さ0.35m

形状　方形

柱穴・周溝　柱穴１基検出。長径0.52×短径0.5×深さ0.96m

遺構調査状況　SA10の範囲確認の際、検出された住居である。周辺のSA18等と比べて遺物の量が格段に少ない。また、遺構が調査区外に広がるので全体の形状は不明である。住居内施設は南側隅に柱穴１基がみられる。

遺物　257以外は床面出土である。

255は高坏の坏部で、口縁部が内傾する器形である。256は坏で、口縁部は内湾し、外面底部中央を若干凹ます丸底の器形である。窯印らしきものが底部付近にみられる。

258は刀子の茎の一部で柄と思われる木質が良好な状態で残存している。

時期　床面出土の須恵器は出土しておらず、埋土中より坏蓋が１点（257）出土している。口縁部は12.6cmを数え、TK209式新段階に相当する。また、土師器の床面出土遺物は５－６期、７－８期、の二時期に相当し、埋土中の遺物もいずれかの時期に収まるようである。これらの編年の示す時期と重複関係から考え、さらに重複関係から６世紀後半～７世紀初頃の住居ではないかと思われる。

SA18（第49・51・52図、259－283）

位置　Z７、AA７グリッド

重複　SA10、28、29を切る。

規模　長軸5.53×短軸4.55×深さ0.50m、15.3㎡

形状　方形

柱穴・周溝　不明。

遺構調査状況　精査後、平面上より範囲を確定できた。ところが床面近くまで掘り下げた際、南西側に黒色埋土の住居跡隅（SA10）が検出された。土層確認が甘く、中央の黒色土に気づいていながらも別住居の可能性に思い至らなかった。そのためSA10の遺物も誤ってSA18として取り上げている可能性がある。住居内施設は不明である。

遺物　259－265、267－269、272－274、277、278、280－282は床面出土で、他は埋土中出土である。

259－261は球胴形甕で、口縁部がゆるやかに外反し、底部が分厚く、もったりとした器形である。262、263の甕とは時期差がみられる。264の甑は1～3㎜の砂粒を含む黄橙色の胎土で、調整は風化のため不明瞭である。外面は口縁部下から底部付近まで、内面は底部周辺にススが付着している。SA10の出土資料と接合している。265は底部の裾が若干拡がるタイプである。266－269は坏である。266は模倣須恵器の坏蓋で、精製された胎土で成形されており調整もミガキが丁寧に施してある。外面は赤彩塗布してあり、明赤褐色を呈している。267の坏は、やや深めの平底の坏で6－7期に相当する器形である。内面全体に黒色処理を施しているが、一部褐色、光沢ある黒色など黒色といっても均一ではない。外面は口縁部付近のみ確認できる。268は器高の浅い平底である。内外面ともに黒色層は口縁部～胴部に確認される。269は深めの丸底で、6期に相当する器形である。内面は黒色層が全体に施されているがその色味は不均一で、底部付近の黒色味が強い。外面も風化のため一部不明だが、おそらく全体に黒色処理を行ったものと想定される。内外ともに艶のある黒色を呈している。

270－276は須恵器坏身・坏蓋である。271は肩部に沈線が入り、口縁はわずかに段をつくっている。272、273は内外面にスス？が付着している。この2点はSA10を検出した南東側のコーナーから出土しており、SA10の遺物である可能性が高い。277は甕で、口縁部はいったん外向きに屈曲し、上に向かって伸びている。器壁は薄く、精緻なつくりである。外面は平行タタキのちナデ、内面は同心円タタキを施している。

278は上下欠損した砥石で、側面四面使用している。279は敲石で、左半分は欠損している。正面・右側面を使用している。281は台石で、正面3か所、下面2か所凹んでいる。282、283は鉄器で282は鋳造剥片である。283は青銅製煙管で後世の流れ込みと思われる。

時期　床面出土の須恵器は3点ある。272･273の坏身が口径とその器形よりTK10型式古段階に相当する。274の坏身はTK217型式古段階に相当する。その他埋土中より出土した須恵器も考慮に入れると、TK10型式古段階と、TK209型式新段階－TK217古段階併行期の二時期が存在する。土師器も同様に二時期存在する。床面出土の遺物は概ね5－6期、7－8期の二時期に分かれ、埋土中の遺物もこの二時期のいずれかに納まるようである。

この二時期は若干時期幅があり、その期間住居跡が継続し使用されたと考えるよりはSA18の遺構調査状況から、TK10型式古段階の遺物は重複しているSA10からの流れ込みと考えられる。そうするとSA18の時期は7世紀初～前半頃と推定される。

SA10（第49・53図、284－289）

位置　Z7、AA7グリッド

重複　SA36を切り、SA18、26に切られる。

規模　長軸4.32×短軸3.62×深さ0.15m、11.5㎡

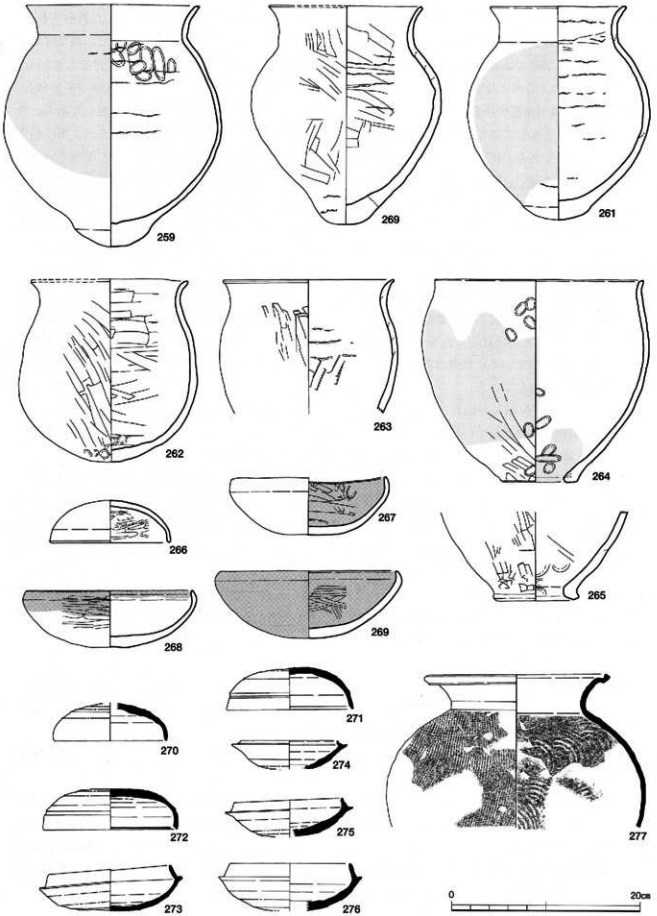
形状　方形

柱穴・周溝　柱穴5基検出。1：長径0.5×短径0.45×深さ0.36m、2：長径0.36×短径0.36×深さ0.3m、3：長径0.53×短径0.45×深さ0.24m、4：長径0.75×短径0.65×深さ0.22m、5：長径0.55×短径0.58×深さ0.17m

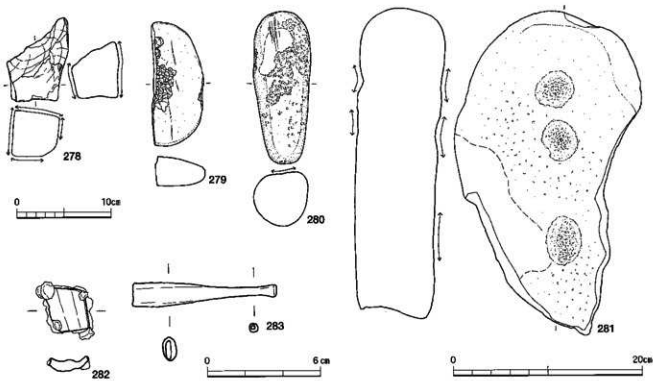
遺構調査状況　前述のとおり、SA18遺構掘削中に検出した。真黒な黒色土で、遺構範囲は明瞭であった。住居内施設は柱穴が5基あり、うち4本は主柱穴と思われる。

遺物　すべて床面出土である。

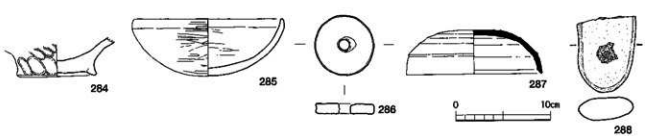
285の坏は丸底で、口縁部がわずかに内湾する器形である。口径は15.7cm287はSA18の床面出土遺



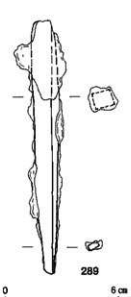
第51図　SA18出土遺物実測図Ⅰ（S=1/4）



第52図　SA18出土遺物実測図Ⅱ（282のみS＝1/2、他はS＝1/4）



第53図　SA10出土遺物実測図（289のみS＝1/2、他はS＝1/4）

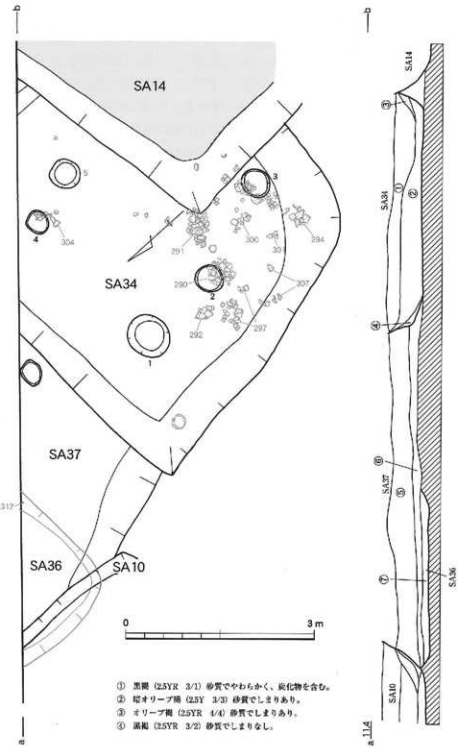


物と接合している。284は甕の底部で若干上げ底気味である。

287は須恵器坏蓋で肩部に段を有す。ほぼ完形で、口径は14.2cmである。

288は敲石で正面一面使用、上部欠損している。289は鉄釘で後世の流れ込みと思われる。

時期　床面出土の須恵器は坏蓋（287）1点で、口径とその器形よりTK10型式古段階に相当する。土師器の床面出土遺物は5－6期、8期と二時期に分かれる。その検出状況、重複しているSA18の推定される時期から考えると、SA10は、5世紀後半～6世紀中頃ではないかと推定される。



第54図　SA34・36・37平面図及び遺物出土状況・土層断面図（S＝1/60）

SA34（第54～56図、290－311）

位置　AA6、AA7グリッド

重複　SA37を切り、SA14に切られる。

規模　長軸5.4×短軸5.25×深さ0.47m、20.1㎡

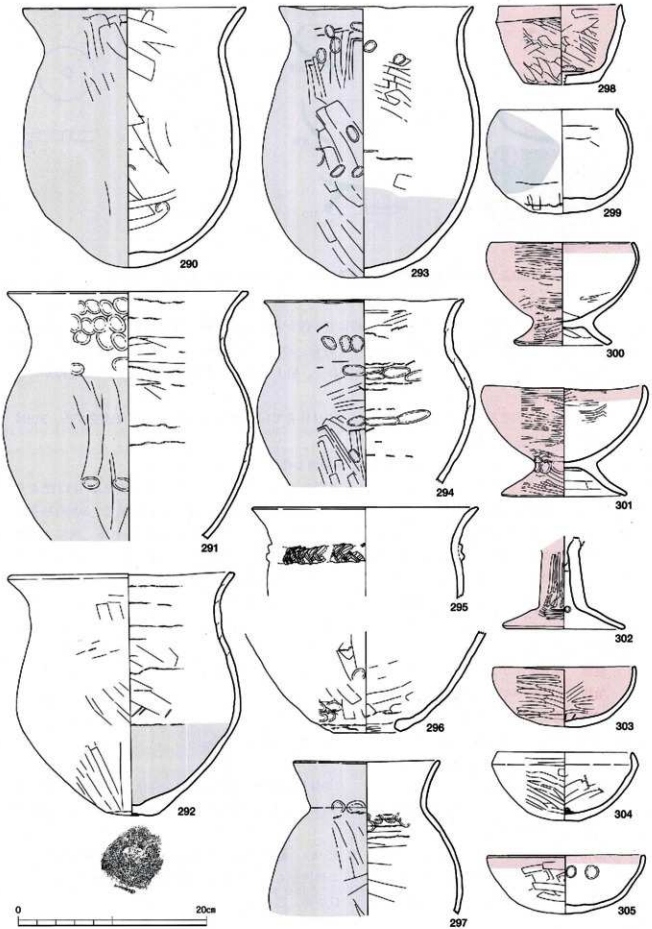
形状　方形。

柱穴・周溝　5基。1：長径0.7×短径0.63×深さ0.11m、2：長径0.44×短径0.42×深さ0.5m、3：長径0.46×短径0.43×深さ0.1m、4：長径0.35×短径0.38×深さ0.15m、5：長径0.52×短径0.46×深さ0.13m

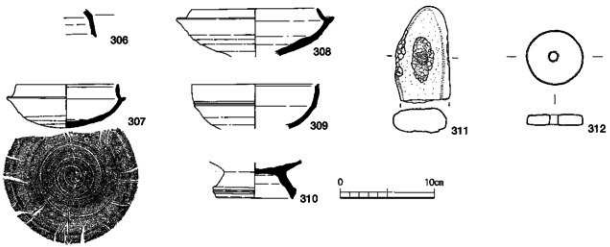
遺構調査状況　埋土中・床面直上いずれも完形の土師器が多く出土した。住居内施設は柱穴が5基検出された。南北に住居の区画に沿って並列しており、主柱穴と思われる。

遺物　290－295、297、300－305、307、310が床面出土で、他は埋土中である。

290－295は長胴の甕で、292は木の葉底、295は頸部に刻目突帯を有する。296の甑は器壁がなだらかでなく、また接合痕が明瞭で粗雑なつくりである。298の鉢は1～3㎜の赤褐色の砂粒を含んでいる胎土で、縦・斜方向のケズリと工具ナデを施している。口縁部は工具で面取して成形している。299の



第55図　SA34出土遺物実測図Ⅰ（S=1/4）



第56図　SA34出土遺物実測図Ⅱ・及びSA36出土遺物（312）実測図（S=1/4）

鉢は、口縁が内傾する球状の器形で、底部に若干段がみられる。300－302は高坏で、300、301は坏状の坏部をもつ器形である。303－305は坏である。303、305は丸底で、口縁部が直線的に立ち上がる器形である。口縁端部は水平に面取されており、胎土も精緻で薄手の器形だが305の器壁はがたがたしている。

306－310は須恵器である。306は坏蓋で、307は坏身で口径10.6cm、立ち上がりは直立する。310は高坏の脚部で裾部に段を有す。

311は砂岩製の敲石で正面・裏面が凹み、両側面も使用している。

時期　床面出土の須恵器は坏身（307）、短脚の高坏脚部（310）で、前述のとおり口径よりTK208－TK47型式に相当する。その他埋土中より出土した坏蓋（306）も同時期で、308の坏身は口径13.4cmでTK209型式古段階に相当する。この二時期はかなりの時期差がみられる。次に土師器だが、床面出土遺物が多く、その大半は概ね5－6期に相当すると思われる。埋土中の遺物も大方はこの時期に収まるようであるが、中には7－8期に相当するものもみられる。これらの遺物の時期と重複関係からSA34は5世紀後半～6世紀中頃の造構と推測される。

SA36（第54・56図、312）

位置　Z7グリッド

重複　SA10、SA37に切られる。

規模　長軸（1.2）×短軸（1.15）×深さ0.1m、（1.38）㎡

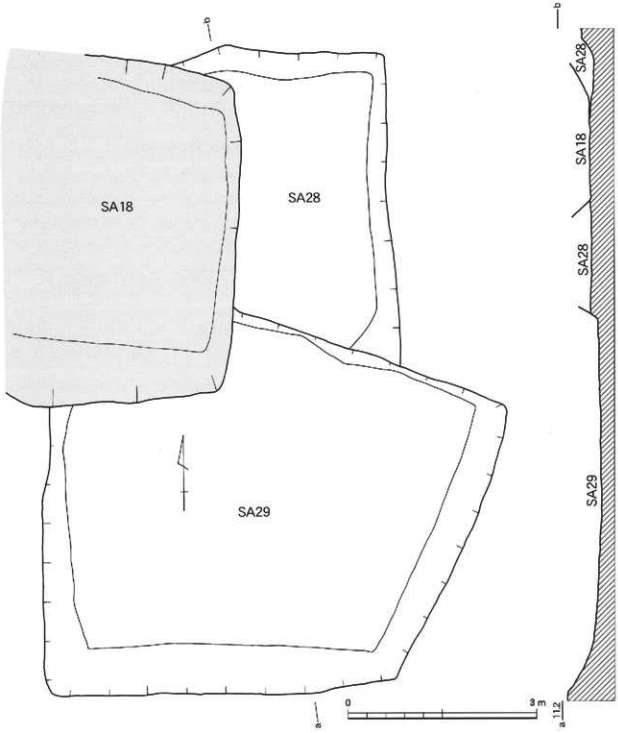
形状　方形？調査区外に遺構が広がるため形状の詳細は不明である。

柱穴・周溝　不明。

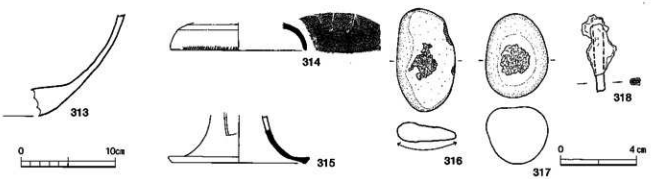
遺構調査状況　SA37の下より検出された。方形住居の隅の一角で、遺構全体は調査区外に広がっていくので検出できなかった。床面付近以外はSA37により削平されている。遺物は床面上より出土した土製紡錘車1点のみである。

遺物　312の紡錘車は、床面出土である。直径5.9cm、器高1.1cm、孔径0.9cm、重量43ｇをはかる。片面が平らで胎土が密になり、その反対面の孔の周囲がもりあがっている状況が観察される。

時期　遺構の重複関係から5世紀後半以前の住居跡と思われる。



第57図　SA28・29平面図・土層断面図（S=1/60）



第58図　SA28出土遺物実測図（318のみS=1/2、他はS=1/4）

SA37（第54図）

位置　Z 7グリッド

重複　SA36を切り、SA10・34に切られる。

規模　長軸（3.0）×短軸（2.2）×深さ0.3m

形状　他の住居跡により削平、また調査区外に遺構が広がるため形状の詳細は不明である。

柱穴・周溝　1基検出。1：長径0.45×短径0.3×深さ0.27m。

遺構調査状況　SA34を掘り下げた後、再度東側の土層断面を確認したところ西側にもう一軒住居跡があることが確認できた。遺物は土師器細片のみで図化出来なかった。住居内施設は柱穴が1基みられる。

遺物　土師器細片のみで、図化できなかった。

時期　5世紀後半～6世紀中頃の時期であるSA10に切られるといった重複関係からSA37は5世紀後半以前の遺構と思われる。

SA28（第57・58図、313－318）

位置　AA 7グリッド

重複　SA17、SA18、SA29に切られる。

規模　長軸（4.35）×短軸2.35×深さ0.3m、（10.2）㎡

形状　方形

柱穴・周溝　不明。

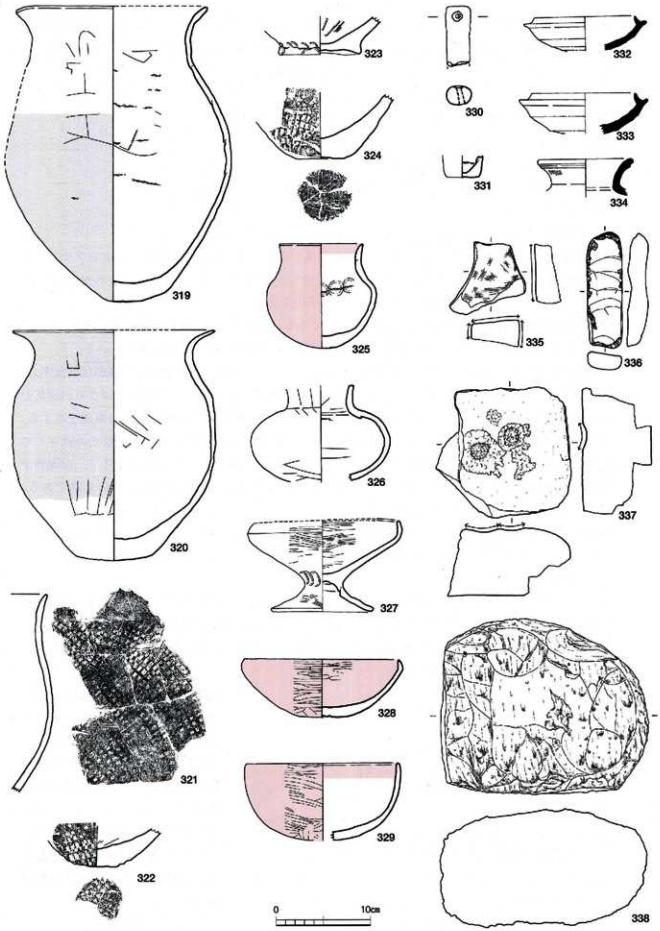
遺構調査状況　SA18の範囲を確定するため東西に設定したトレンチ上で立ち上がりを確認、平面上での検出を行った。その結果、SA17、18、29に切られることが判明した。埋土はオリーブ褐を呈している。SA29の埋土も同色で、若干SA29のほうがしまりが良い程度の差しかない。また、SA29との切りあいを確認するため南北に設定したトレンチから馬歯の一部が出土している。住居内施設は不明である。

遺物　313、318が床面出土で、他は埋土中である。

313は甕の底部で、レンズ状の丸底を呈す。

314、315は須恵器で314の坏蓋は口縁部に工具で施文されている。316は砂岩の敲・磨石で四面使用している。318は鉄鎌の茎部である。

時期　須恵器の床面出土遺物はなく、すべて埋土からの出土である。坏蓋（314）は口径14.2cmで、TK209型式古段階に相当、高坏（315）脚部も同時期と思われる。土師器の床面出土は甕底部（313）



第59図　SA29出土遺物実測図Ⅰ（S＝1/4）

1点のみで、6期に相当し、須恵器の示す時期との時期幅が大きい。どちらの時期がSA28の時期として妥当であるか重複関係も含めて検討すると、土師器の示す6世紀前半～中頃の時期と想定される。

SA29（第57・59・60図、319－339）

位置　AA7、AA8グリッド

重複　SA28を切り、SA18に切られる。

規模　長軸6.75×短軸6.0×深さ0.35m、22.5㎡

形状　方形

柱穴・周溝　不明。

遺構調査状況　SA18の範囲かつSA28との重複関係を確定するため南北に設定したトレンチ上で立ち上がりを確認、平面上での検出を行った。埋土はSA28同様オリーブ褐を呈しているが、SA28に比べ若干しまりの良い埋土である。住居内施設は不明である。

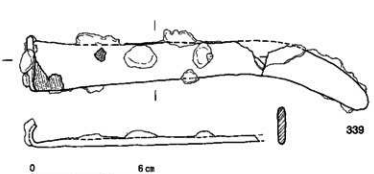
遺物　319－329、331が床面出土で、他は埋土中である。また、この他に石製紡錘車（464）が出土しているが、SA14出土の紡錘車と接合したため、SA14の記述欄でまとめて説明している。

319は完形の甕で、底部は丸底で、胴部中央が最大径となり、頸部で一旦直立し口縁部は外反する。調整は風化のため不明瞭である。320の甕は底部の厚い丸底で肩部が張り、頸部ですぼまり口縁部が大きく外方に開く器形である。321、322、324は外面タタキの甕で、324は底部に木の葉底を有する。325は小型丸底壷で、口縁部が短く直線的に立ち上がる。326は長頸壷で、頸部～胴部のみ残存しており、胴部は肩部の張る扁球胴形である。327は坏部が坏状の高坏で、328は完形の坏で、口縁部が内湾し底部は平底である。329は椀で、口縁部はわずかに内湾し、底部は平底気味の丸底である。330は土錘、331はミニチュア土器である。

332－334は須恵器で、332、333の坏身は立ち上がりが短く内傾しており、口径は10－11cmであることからTK209新段階－TK217型式古段階の時期に相当する。334は壷の頸部もしくは提瓶と思われる。335-338は石器である。

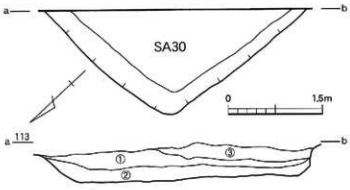
335は砥石で、上下裏面欠損しており、三面の使用がみられる。337は白石で、左側面・裏面欠損している。正面中央2か所凹んでいる。338は軽石である。左側面・下面を水平に成形している。

339は鉄鎌で、刃先は丸みを帯びた長三角形を呈す。木柄着装部は身に対して鋭角に折り返している。木柄装着部の木質痕が確認される。

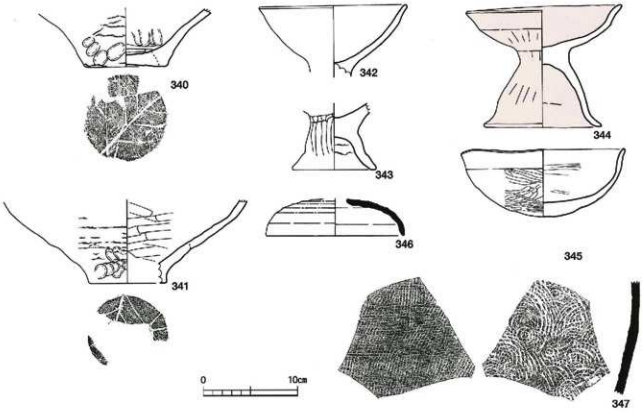


第60図　SA29出土遺物実測図Ⅱ（S=1/2）

時期　床面出土の須恵器はなく、その他埋土中より出土した坏身（332・333）は前述のとおりTK209新段階－TK217型式古段階に相当する。土師器は土錘以外すべて床面出土で5－6期、7－8期の二時期存在するが、重複する住居の年代から考慮するとSA29は6世紀中～7世紀初頃と考えられる。



第61図　SA30平面図・土層断面図（S=1/60）



第62図　SA30出土遺物実測図（S=1/4）

SA30（第61・62図、340－347）

位置　AA7、AA8、AB7グリッド

重複　なし。

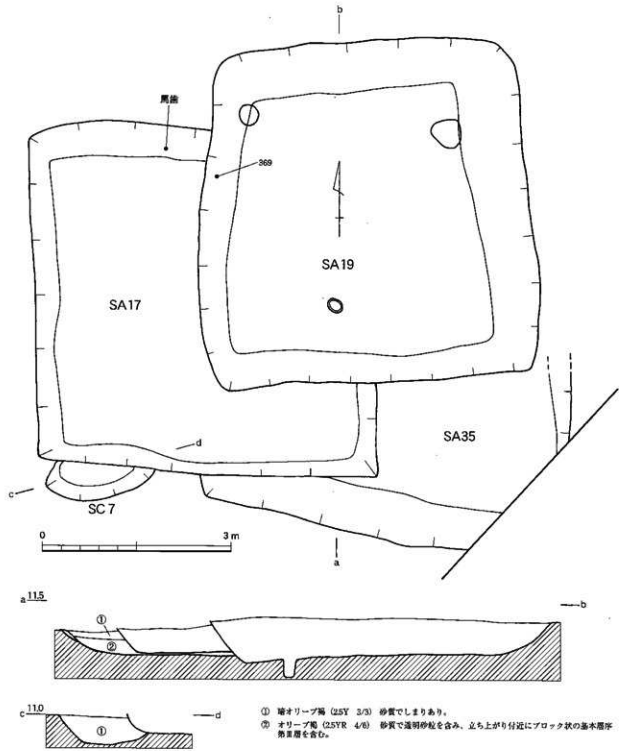
規模　長軸（1.7）×短軸（1.55）×深さ0.45m

形状　方形？調査区外に遺構が広がるため形状の詳細は不明である。

柱穴・周溝　不明。

遺構調査状況　平面上で範囲を確定し掘り下げていった。住居は調査区外に広がるため、一隅しか検出できなかった。隅付近より二枚貝が数枚、埋土中より出土している。

遺物　344、346、347以外は床面出土である。340は甕の底部で、木の葉底を有す平底である。341は

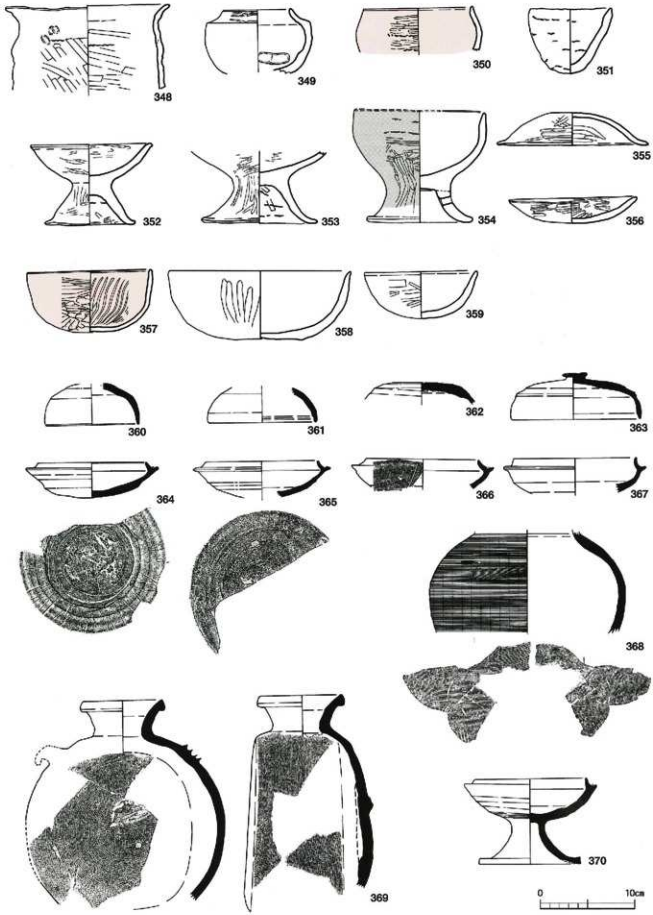


第63図　SA17・19・35・SC７平面図・土層断面図（S=1/60）

甕もしくは浅鉢で体部は大きく開き、底部平底で340同様木の葉底を有す。342－344は高坏で、342は口縁が大きく開く坏部で、344の口縁部は短く外反し、器高の浅い扁平な坏部を有す高坏である。345は坏で、口縁部がわずかに外反し、底部は丸底である。

346、347は須恵器で、346の坏蓋は口径が14cm前後でTK209型式古段階に相当する。

時期　床面に須恵器はなく、その他埋土中より出土した坏蓋（346）は前述のとおりTK209型式古



第64図　SA17出土遺物実測図Ⅰ（S=1/4）

段階に相当する。土師器の床面出土は340、341の甕もしくは浅鉢で、この他に高坏（342、343）、坏（345）も8－9期に相当する。これらの遺物の示す時期より6世紀末～7世紀中頃の住居と考えられる。

SA17（第63～65図、348－375）

位置　AA7グリッド

重複　SA19に切られ、SA35、SC7を切る。

規模　長軸5.5×短軸5.34×深さ0.38m、21.2㎡

形状　方形

柱穴・周溝　不明。

遺構調査状況　住居跡が3軒切りあっているうちの一軒で、最初にSA19の範囲を確認し、次にSA35、最後にSA17を確認した。調査当初はSA35との切り合いを間違えており、遺物や土層断面の確認より訂正した。SA17の出土遺物は他の住居跡に比べ甕・壺類が少なく、鉢・高坏類が多いという特徴がある。住居内施設は不明である。

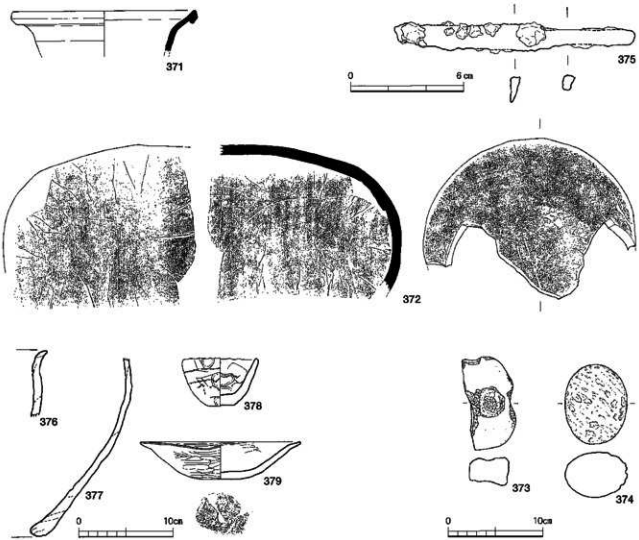
遺物　348－365、369、370、374は床面出土で、他は埋土中出土である。

348は小型の甕で、胴が一定の幅で縦に長いバケツ形の器形である。349は模倣須恵器の壺で、350は鉢である。351は深鉢で、内外面とも黒変している。胎土は甕の胎土と同じである。352は高坏で、口縁が大きく開く坏部にハの字に開く脚部をもつ。354は口縁部が真っ直ぐ立ち上がり、器高の深い坏部をもつ高坏である。355は壺で、356は器高3.2cmと平坦な坏である。357は内面に暗文を施した椀で、ほぼ完形である。358は鉢で平底、口縁部は直線的に開く。口縁端部は断面三角である。

360－372は須恵器で、360、361は壺蓋である。362、363は坏蓋、363は摘付の高坏蓋で、口径は13.4cmである。364－367は坏身で364－366は立ち上がりが内傾しており器高も浅い。3点とも口径は11－12cm内である。367の坏身はやや立ち上がりが高く、口径は13cm内である。369は提瓶である。370は完形の有蓋高坏で、口径11.8cm、受部径13.5cmであり、363とセットの可能性有り。脚部は短脚で脚部径は細い。焼成不良のため胎土は磁器化しておらず風化している。372は横瓶の胴部である。SA19出土遺物と接合している。外面はロクロ成形後丁寧にナデを施している。

373は楕円状に成形された軽石で、374は蔽石である。左側面を欠損している。三面使用している。375は刀子で、関は背部に斜行してつくられている。

時期　床面出土の須恵器は360－365、369、370と多い。363の坏蓋は370と同時期で、TK217型式古段階に相当する。その他坏身（364、365）も同時期である。提瓶（369）はTK43－209型式に相当する。埋土中より出土した須恵器も大半同時期で、坏身（367）はTK209型式古段階に相当、横瓶（372）は217型式よりさらに下る可能性があるが、SA19との接合資料であり流れ込みの可能性がある。これより概ね須恵器はTK43型式－TK217型式古段階に該当する。土師器は概ね8－9期に相当すると思われる。これらの編年の示す時期と重複関係から6世紀後半～7世紀前半頃の住居ではないかと想定される。



第65図　SA17・SC7出土遺物実測図（SA19：371−375、SC7：376−379、375のみS=1/2、他はS=1/4）

SA19（第63・66図、380−396）

位置　AA7、AB7グリッド

重複　SA17、35を切る。

規模　長軸5.45×短軸5.2×深さ0.6m、16.8㎡

形状　方形

柱穴・周溝　柱穴1基。長径0.25×短径0.22×深さ0.28m

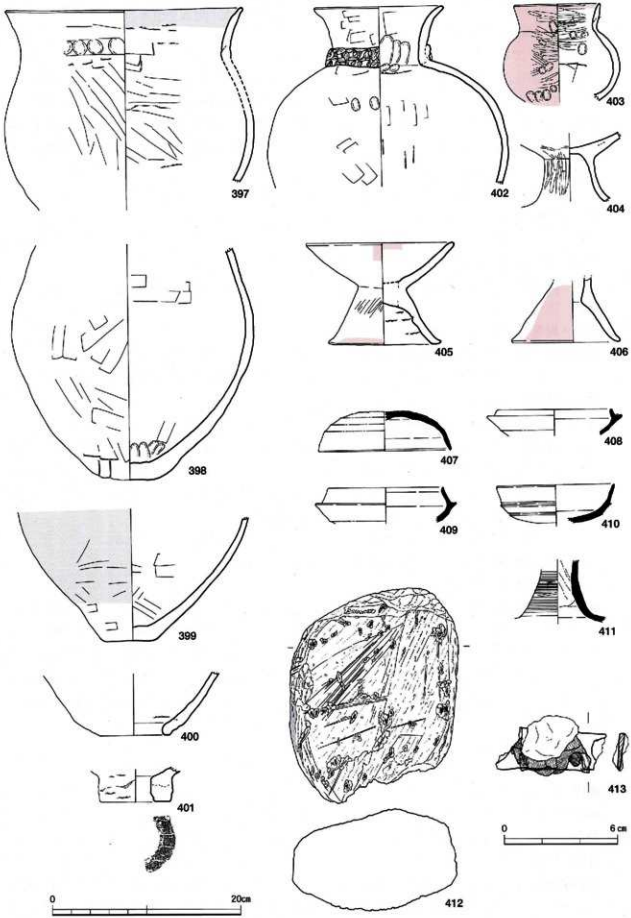
遺構調査状況　SA17・19・35の3軒切りあっているうち、最初にSA19の平面を確認した。住居内施設は柱穴が1基検出され、埋土は黒褐色である。西側の立ち上がり付近の狭い範囲にわずかにブロック状の基本層序第Ⅲ層を含んだ埋土が堆積し、さらに広い範囲で東側の立ち上がりから全体に入ったブロック状の基本層序第Ⅲ層を含んだ埋土が堆積していることから、東側周辺の埋没が一気に崩れた様子がうかがえる。

遺物　380−386、389−391、393、394、396、397が床面出土で、他は埋土中である。380は甕もしくは甑の口縁〜胴部である。胎土は橙色で、薄手である。382、383は小型の長胴甕である。底部は木の葉底を有する平底で、胴部との境が明瞭である。384は小型の甑で、胎土は黄橙色である。底部外

面に黒変がみられる。385は鉢で、外面は縦方向にミガキが施され、口縁部に稜線が入る。386は鉢で、接地面の広い平底で木の葉底を有す。

388－392は須恵器である。389は坏蓋で底部にヘラ記号がみられる。390は有蓋高坏、391は鉢であるが、本来ならば柄が付く形態と想定されるがその箇所は欠損している。392は脚の胴部で正面中央に穿孔あり。肩部に文様帯があり、全体にカキ目を施す。頸部はその割れ口から細めのものと思われる。底部はやや平らである。

第66図　SA19出土遺物実測図（396・397のみS＝1/2、他はS＝1/4）



第67図　SA35出土遺物実測図（413のみS=1/2、他はS=1/4）

393は長珪石の砥石で上下裏面を欠損している。394は敲石で下部を欠損している。正裏面が凹んでおり、上面・両側面も使用している。

396は鏃子である。

時期 床面出土の須恵器である坏身（389）は口径12cm内でTK209型式新段階、有蓋高坏（390）と鉢（391）はTK217型式新段階に相当する。その他埋土出土の遺物は、坏蓋（388）はTK217型式古段階、甕（392）も同時期と思われる。これより概ね須恵器はTK209型式新段階－TK217型式新段階に収まる。土師器は概ね8－9期に相当し、これらの遺物の示す時期や重複関係から7世紀初～中頃の住居と考えられる。

SA35（第63・67図、397－413）

位置 AA7、AB7グリッド

重複 SA19、17に切られる。

規模 長軸5.95×短軸（2.6）×深さ0.3m

形状 方形。

柱穴・周溝 不明。

遺構調査状況 住居跡が3軒切りあっているうちの一軒で、最初にSA19の範囲を確認し、次にSA35を確認した。調査当初はSA17→35と考えていたが、遺物や土層断面の観察により訂正した。住居内施設は不明である。

遺物 397－407は床面出土、他は埋土中である。

405はSA17の出土遺物と接合している。397は球胴の甕で、口縁部はゆるく外反する。398は長胴甕の胴部～底部で、400、401は甑で、401は成形後に底部中央を抉り取ったと思われる。木の葉底を有す。402は壷で、頸部に刻目突帯を有す。404、405は高坏でどちらも坏部が体部から大きく開く器形である。406は高坏の脚部で、笠状に開く器形である。

407－411は須恵器である。407は坏蓋で、肩部に稜線が入り、口縁を丸くつくる。

412は軽石製の砥石で、楕円状に成形され正面は擦痕が確認できる。

413は鎌の刃部で、木質が残存している。

時期 床面出土の須恵器は坏蓋（407）のみで、口径14cm内であり、TK209型式古段階に相当する。その他埋土出土の坏身で408は407と同時期で、409は立ち上がりが大きく、MT15－TK10型式に相当する。土師器はすべて床面出土で、概ね4－5期、5－7期の二時期に相当するようである。土師器は二時期に分かれたが、須恵器の時期を考慮し、また重複関係から6世紀前半～後半頃の住居ではないかと想定される。

SA15（第68～70図、414－437）

位置 AB7、AB6、AC6グリッド

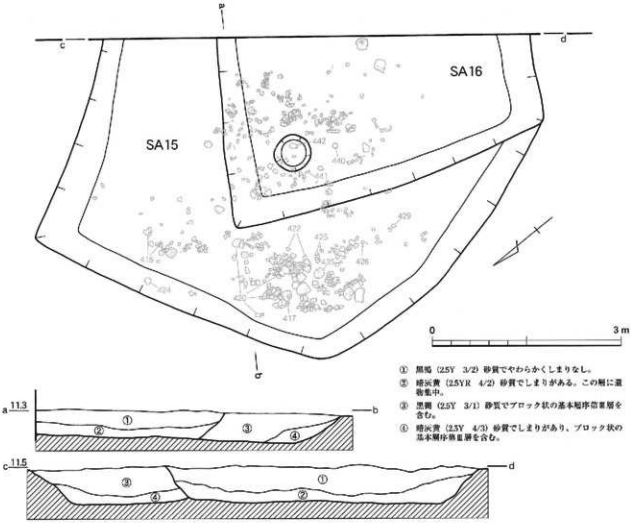
重複 SA16に切られる。

規模 長軸6.4×短軸（4.2）×深さ0.6m

形状 方形。調査区外に遺構が広がるため詳細は不明である。

柱穴・周溝 不明。

遺構調査状況 平面上より遺構プランを検出したが、その後七層断面よりもう1軒住居を確認（SA16）し、SA15の南側がSA16に切られていることが判明した。埋土中の遺物量が多い住居であり、その大半は土師器だが馬歯も埋土中より出土している。

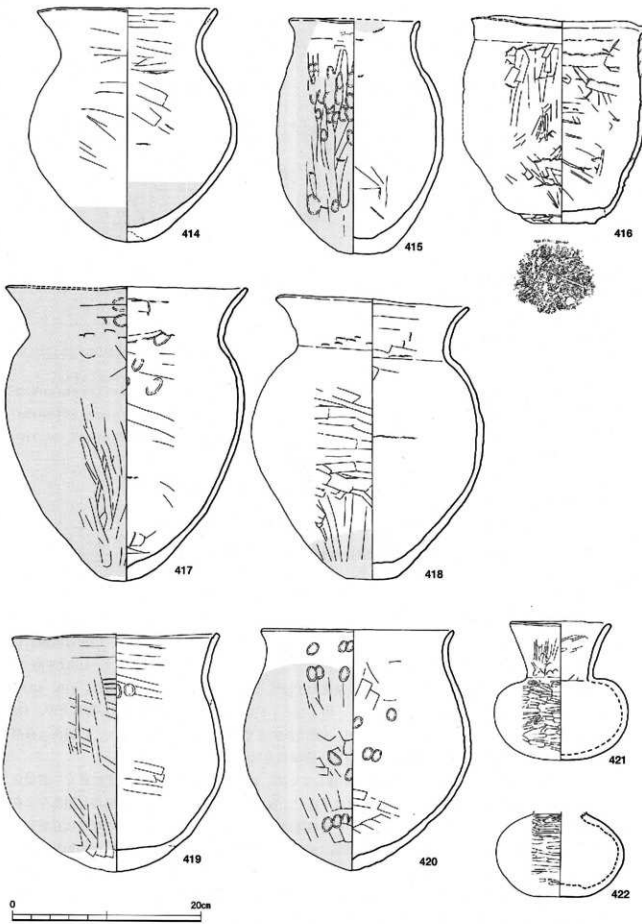


第68図　SA15・16平面図及び遺物出土状況・土層断面図（S=1/60）

遺物　床面出土は、414－427、429、433、435で他は埋土より出土した。

414－420は甕で、417－420はSA16出土遺物と接合している。414は球形胴の甕で口縁部はゆるやかに外反する。底部は丸底気味。415、416は長胴甕で415は頸部でわずかにくびれ、口縁は直線的に立ち上がる。416は口縁が逆L字状に近く、底部は木の葉底を有す平底である。417、418は平底で、口縁部はゆるやかに外反する器形で、その頸部のすぼまりから壺である可能性が高い。419、420は球形胴の甕で、口縁部の屈曲はゆるくなり、短くなる。420の底部は内面中央が凹む器形だが、419と同様レンズ状平底気味の丸底である。421、422は長頸壺である。421はほぼ完形で、口縁部と体部の長さが近似しており、422は胴部のみ残存で、扁球状を呈す。

423は高坏の脚部で、脚部との接地面に保護している。424の鉢の胎土は甕の胎土に近く、黄橙色で1～3㎜の砂粒を含むものである。底部は平底で、木の葉底を有する。底部中央の欠損部分に粘土が補填してあるが、木の葉底の静脈部分が補填箇所には見られないことから、成形後に補填したと思われる。425は椀で口縁部がゆるく外反し、426の坏は口縁端部がわずかに内湾、427の坏は内傾している。いずれも平底である。428は鉢で、底部はユビでつまみ出し高台のように成形している。429はミニチュア土器で、丁寧なナデ成形をおこなっている。430は土製紡錘車で、直径6.6㎝、器高1.2㎝、孔径0.9㎝、重量は70ｇをはかる。一部剥離がみられ、片面の孔の周囲はわずかにもりあがっている。



第69図　SA15出土遺物実測図Ⅰ（S=1/4）

431は須恵器の坏身で、底部にヘラ記号を有し、口径は12cm内である。432は甕の口縁部で、口縁が強く外傾しており、口縁と頸部に波状文が施されている。

434は砥石で、上部・裏面を欠損している。筋状に擦痕が入っており、鉄器等を研ぐのに使用した可能性がある。435は敲石で裏面を欠損している。正面中央が使用され凹んでいる。436は軽石である。右側面・下面を水平に成形し、他は円形に成形している。

437は鉄器で、方頭鏃の鏃身の一部である。

時期 須恵器の出土数は少ない。埋土中より出土した坏身（431）はTK209新段階に相当する。その他埋土中より出土した甕（432）は若干古く、須恵器全体ではTK10型式－209新段階に内包される。土師器は概ね6期、7期、8－9期と三時期みられる。これらの遺物の示す時期と重複関係から6世紀中～7世紀初頃の住居ではないかと推定される。

SA16（第68・71図、438-442）

位置 AB7、AB6、AC6グリッド

重複 SA15を切る。

規模 長軸4.8×短軸（2.6）×深さ0.5m

形状 方形

柱穴・周溝 柱穴1基。長軸0.6×短軸0.6×深さ0.33m

遺構調査状況 SA15の土層断面よりSA16を確認し、土層断面より確認した立ち上がりを線でつないで、住居のプランを確定した。住居内施設は柱穴が1基みられる。

遺物 440－442は床面出土、他は埋土中である。

438、439は高坏坏部もしくは坏の口縁部で、440はミニチュア土器である。丁寧にナデ成形され、底部外面は中央が凹んでおり蛇の目状である。

441、442は敲石で、441は上面を使用し、442は左側面以外を使用している。

時期 須恵器は出土しておらず、時期判定が可能な遺物は土師器のみで、坏（438）は7期末－8期に相当する。編年の示す時期と重複関係から7世紀初～前半頃の住居ではないかと想定される。

SA11（第72・73図、443－449）

位置 AB6グリッド

重複 SA25を切る。

規模 長軸5.4×短軸4.3×深さ0.25m、16.1㎡

形状 長方形か。埋土 黒褐色。砂質で、しまりがある。炭化物を少し含む。

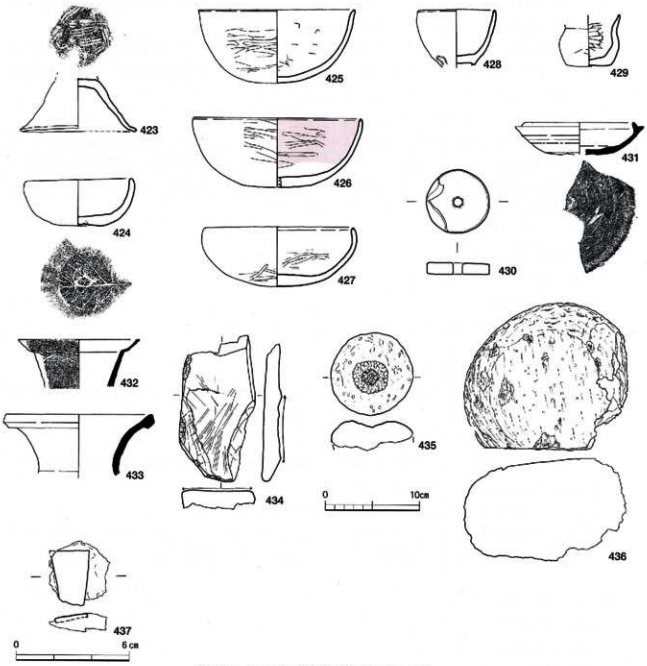
遺構調査状況 埋土は上層が黒褐砂質土、下層は暗灰黄砂質土で、皿状に堆積していた。住居跡の密集している箇所で、住居プランの認定は難しく、南壁のプランは四隅より想定したラインである。

遺物 444－449は床面出土、他は埋土中である。444、445は壷で、口縁部は直立気味に立ち上がり、胴部最大径が中位になる。446は広口の壷で、447は模倣須恵器の坏身である。口縁部は短く内傾する。

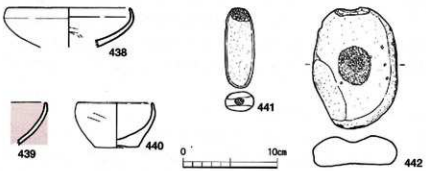
448の須恵器坏蓋は肩部に沈線が入り、口縁部に段を作る。

449は敲石で上部を欠損しており、使用面は上部・下面・左側面の三面である。

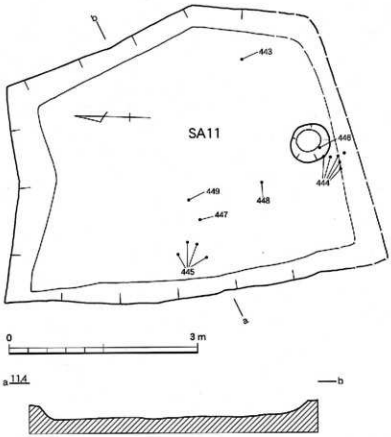
時期 床面出土の須恵器は坏蓋（448）1点で、口径と肩部の沈線よりTK10型式古段階に相当する。土師器は埋土中の遺物も含めて概ね7－8期に相当するようである。これらの編年の示す時期と重複関係からSA11は、6世紀中～7世紀前半頃の住居ではないかと推定される。



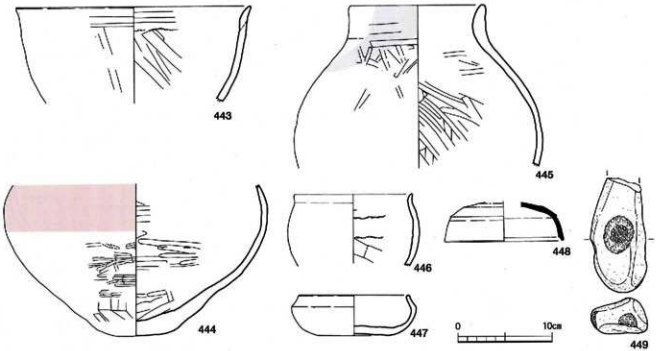
第70図　SA15出土遺物実測図Ⅱ（S=1/4）



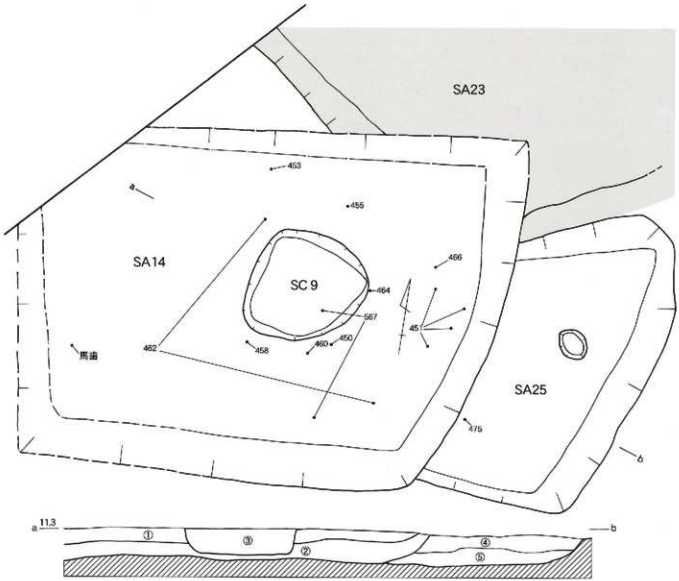
第71図　SA16出土遺物実測図（S=1/4）



第72図　SA11平面図及び遺物出土状況・土層断面図（S=1/60）



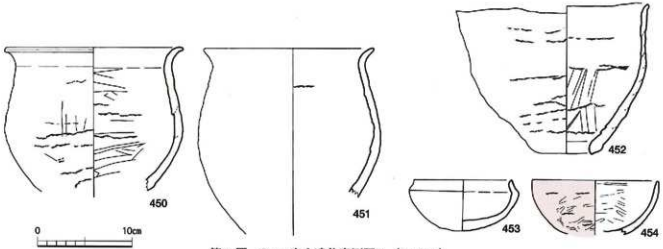
第73図　SA11出土遺物実測図（S=1/4）



① 黒褐 (2.5Y 3/2) 砂質でしまりあり。
② 暗灰黄 (2.5Y 4/2) 砂質でしまりがあり、ブロック状の基本層序第Ⅱ層を含み、立ち上がり付近は基盤の混入割合が高い。
③ SC 9の埋土。
④ 暗オリーブ褐 (2.5YR 4/3) ややしまりあり。遺物を含む。
⑤ 暗灰黄 (2.5YR 4/2) 砂質でしまりなく、基本層序第Ⅱ層を含む。

0 3 m

第74図 SA14・25・SC 9 平面図及び遺物出土状況・土層断面図 (S=1/60)



第75図 SA14出土遺物実測図Ⅰ (S=1/4)

SA14（第74～76図、450－469）

位置　AA６、AB６グリッド

重複　SA23、25、34を切る。

規模　長軸7.52×短軸5.52×深さ0.5m、26.7㎡

形状　長方形。

柱穴・周溝　不明。

遺構調査状況　平面上より大まかな遺構範囲、そしてトレンチによる断面確認を行い、住居プランを確定させた。住居内施設は不明だが、別遺構としている中央のSC９がSA14の住居内施設の可能性はある。また、埋土中から馬歯が出土している。

遺物　450－456、459－462、464は床面出土、他は埋土中である。450、451は小型の長胴甕で、452は小型の球胴形甑である。底部から外方に向かって直線的に開き、胴部中央で屈曲し直線的に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。453は模倣坏で、454は坏である。外面は赤彩塗布されており、口縁部がわずかに外反する。455は小型の広口壺で、底部は平底気味である。

457－462は須恵器で、457は口縁部が外反することから壺蓋である。459、460の坏身の立ち上がりはやや短めで内傾している。461は短頸壺で、外面底部には自然釉がかかっていることから伏せて焼成したと思われる。胴部は楕円形で、底部はやや平らである。462は甕の口縁～頸部である。焼成不良で胎土はにぶい橙色をしている。

463は砥石で、上下裏面欠損している。464は石製の紡錘車で、約10m離れたSA29の出土資料と接合した。不定円形で、表面は風化しており石材は463の砥石と同様珪長石と思われる。丁度中央から割れているが、SA29より出土した破片の断面に、中央の穿孔とは別に未貫通の穿孔がみられる。破損後に穿たれたものと思われ、その状況から破損後に行われたものと思われる。

465－467は鉄器である。465は鉄鎌で、木柄着装部は身に対してほぼ直角に折り返している。木質等の付着は錆化のため不明である。466は刀子で、背部に対して斜めに関をつくっている。467は凹型の鏃もしくは鋤先で、袋部を有さない扁平な形状である。木質が体部中央に付着している。468、469は土師質の玉である。

時期　須恵器の床面出土は坏身が２点でTK209型式内に相当する。462はこの時期よりTK217型式まで下る可能性があり、概ねTK209－TK217型式内に収まる。土師器は概ね７－８期に属し、これらの編年の示す時期と重複関係から少なくとも６世紀末～７世紀前半頃の住居ではないかと思われる。

SA25（第74・77図、470－475）

位置　AB６グリッド

重複　SA11、14に切られる。

規模　長軸4.6×短軸（2.6）×深さ0.48m

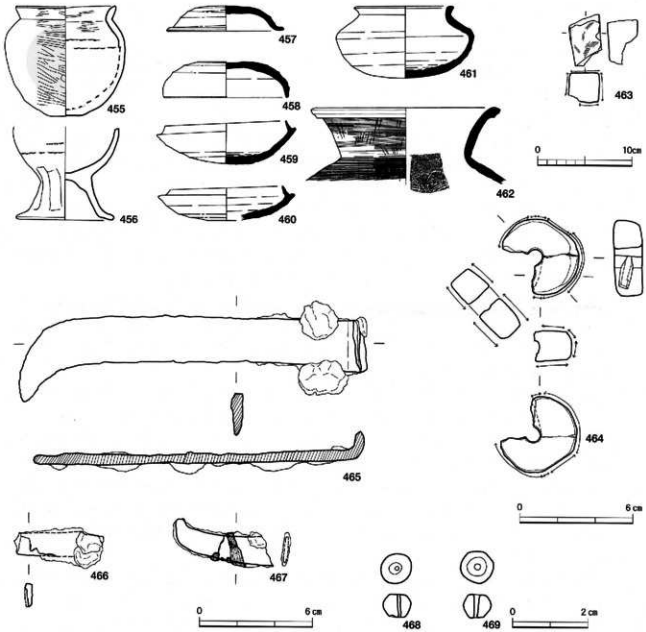
形状　方形

柱穴・周溝　柱穴１基検出。長軸0.5×短軸0.45×深さ0.11m

遺構調査状況　平面上でSA14の下から二隅が確認された。西側半分はSA14により削平されている。住居内施設は柱穴が１基検出されている。

遺物　470、473、474は床面出土で、他は埋土中出土である。470は甕の口縁部で、外面には煤が付着している。

472は須恵器坏身で立ち上がりが非常に高く、口径は11cm内と小型の器形である。473は須恵器壺

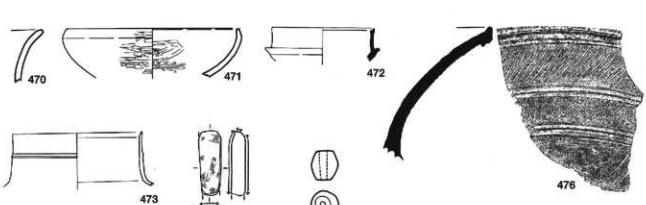


第76図　SA14出土遺物実測図Ⅱ（464－467はS＝1/2、468・469はS＝1/1、他はS＝1/4）

の口縁部で焼成不良のためか胎土はにぶい橙のままである。

474は砥石で、下部欠損しており、他は全面使用している。476は水晶製切子玉で断面は整った六角形を呈する。孔は片面穿孔である。

時期　須恵器坏身（472）はTK208型式に相当する。土師器は坏もしくは高坏（471）の口径が18cmを超える大きさで器高も浅いことから概ね７－８期と思われる。これらの編年の示す時期と重複関係から少なくともSA25の時期は、５世紀後半～６世紀中頃内と推定される。



第77図　SA25・SC９出土遺物実測図（SA25：470－475、SC９：476、475のみS=1/1、他はS=1/4）

SA23（第78～83図、477－509）

位置　AA６、AA５、AB６、AB５グリッド

重複　SA13を切り、SA14、SE３に切られる

規模　長軸7.5×短軸（5.5）×深さ0.5m

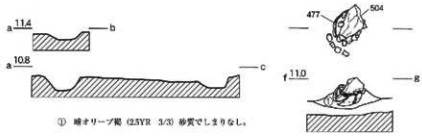
形状　方形。

遺構調査状況　平面上でプランを想定し、土層断面で確定した。Ｂ－２区内ではSA20、13に次ぐ遺物量の多さで、土師器の完形も多く出土している。住居内施設は柱穴が４基検出、その位置から主柱穴と認定した。そして住居跡中央には焼土がみられ、その上面からは赤化した土器（483）が出土しているが掘込などはみられなかった。地床炉として利用されたと思われる。その西側には、ピット状の掘込が検出された。掘込の埋土は焼土混じりの暗褐色砂質土（7.5YR3/4）で、遺物は出土しなかった。埋甕？の可能性も考えられる。その他に住居跡西側からは、完形の土器（477）が石器（504）に押しつぶされた状態で検出されている。

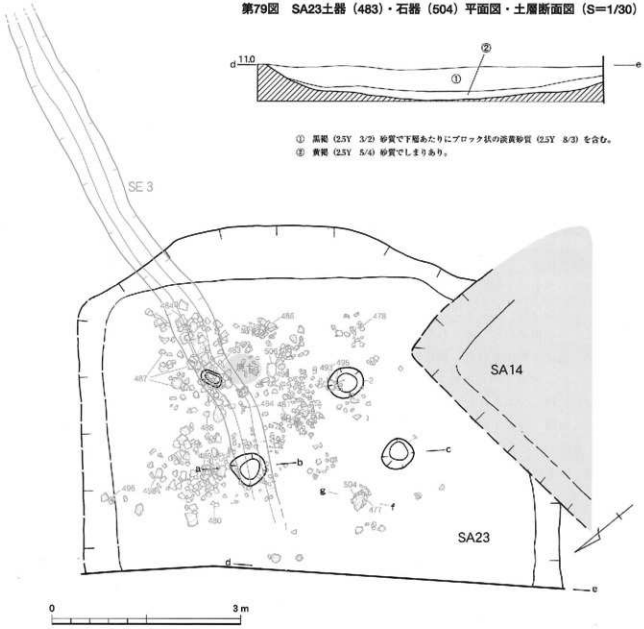
柱穴・周溝　柱穴４基検出。１：長径0.35×短径0.17×深さ0.2m、２：長径0.6×短径0.5×深さ0.2m、３：長径0.56×短径0.5×深さ0.23m、４：長径0.55×短径0.45×深さ0.2m

遺物　床面出土は477－484、486－490、492－496、498、499、504－506で、他は埋土中出土である。477、478は球形胴甕で、477は平底で頸部が急にしまり、口縁端部のみわずかに外反する。478は477より長めの口縁で、ゆるやかに外反する器形である。479は当初球形胴甕と思われたが、その胎土や頸部のすぼまりから、壺の可能性もある。480－483は長胴甕で480はレンズ状の平底、482は中央が円形に凹む蛇の目状の平底である。これは底の部分を輪状にした粘土で形成しており、後で中央の穴を粘土で埋めたためである。481以外はほぼ完形で、外面にススが付着している。483が尖底気味の丸底である。外面は底部以外にススが付着している。焼土内から破片が出土していることから地床炉として使用された甕ではないだろうか。484－486の球形胴甕は口縁が胴部最大径と同じもしくは上回る器形で、口縁が大きく外反する。484はやや平らな丸底、485は円形の粘土板をユビで底部に貼り付けた高台状の底部である。486の口縁形態は上からみると円形ではなく楕円形であり、実測は最大径で行っている。底部は木の葉底を有する平底である。487は甑で、薄手の丁寧なつくりである。

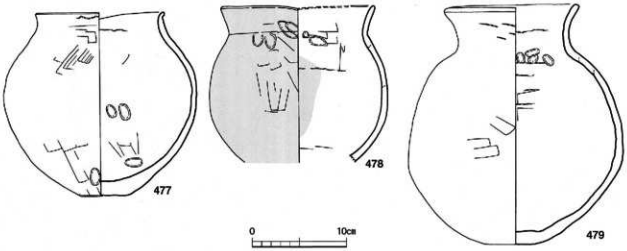
488は鉢である。丁寧なミガキが外面に施されている。口縁付近も丁寧に面取されており、稜線が



第79図　SA23土器（483）・石器（504）平面図・土層断面図（S=1/30）



第78図　SA23・SE 3 平面図及び遺物出土状況・土層断面図（S=1/60）



第80図　SA23出土遺物実測図Ⅰ（S=1/4）

入る。489－491は広口の壺である。口縁は短く外反し、頸部はわずかにくびれ、底部は平底気味で中央が円形に凹んでいる。胴部最大径と口径が近い。外面は丁寧なミガキ、内面は丁寧なナデを施している。492－495は坏で、492は木の葉底を有する平底で、口縁はわずかに内傾している。器壁も厚めで一定ではなく、調整も雑で工具ナデの痕が残っている。493は丸底で、口縁が内傾する。494は平底で、口縁が直立する深めの坏である。495は丸底で、口縁がわずかに外反する器形である。493・495は493が外側、495が内側で入子状態で出土している（第78図）。496、497は模倣坏で、496は坏蓋、497は坏身である。497は口縁部の立ち上がりが内傾する器形で、内外ともに赤彩塗布を施している。498はミニチュア土器で、内面は底部中央から口縁部に向けて花弁状にナデを施している。499は土製紡錘車で、直径5.7cm、器高1.0cm、孔径1.1cm、重量は37ｇをはかる。側面に指で強くなでられたような跡が残り、片面の孔の周囲がわずかにもりあがっている。

500－503は須恵器で、500、501は坏蓋である。500の底部は粗雑なヘラ切りで、肩部に稜線が入る。501は底部にヘラ記号を有し、口縁部はやや凹んでいる。502、503は坏身で、502は立ち上がりが高く復元口径11.0cm、503は502に比べて立ち上がりはやや短く、やや内傾する。口径9.8cmである。

504は台石で、正面１か所凹んでいる。この石は第79図のように直立する土器（477）の上に横に置いた状態で検出された。505、506は軽石である。505は二面、506は一面水平に成形している。

507は敲石で、下部を欠損している。正面中央、上部を使用している。

508は鉄鏃で、刃部を欠損している。方頭形もしくは圭頭形と思われる。509は茎部で、上部に別の茎部が錆着している。

時期　須恵器の床面出土は坏身（503）１点だが、TK217型式新段階に相当する。他の埋土出土の須恵器は坏蓋（500、501）２点が同時期、坏身（502）がTK10型式古段階に相当し、二時期存在する。土師器の床面出土は概ね６－８期に相当し、須恵器の示す時期と一致する。このことからSA23は、遺物、重複関係から６世紀中～７世紀前半の遺構と思われる。